

平成23年3月15日

根本正顕彰会会報 第66号

発行者 根本正顕彰会

目次

- | | | | |
|---|---|------------|-----|
| 1 | ごあいさつ「1年間を振り返って」 | 会長 會澤義雄 | 1頁 |
| 2 | 根本正顕彰会第2回公開講座報告(附:資料)
テーマ『根本正と教育』II
「根本正の家庭教育環境」 | 発表 増子輝雄副会長 | 2頁 |
| 3 | 水戸藩の書法についての推論 | 加藤純二 | 27頁 |
| 4 | 根本正翁の先祖たちと「東木倉村図」 | 仲田昭一 | 29頁 |
| 5 | 「笑い与健康」 | 小林茂雄 | 35頁 |
| 6 | 根本正顕彰会会報文献目録(その3)－第49号～第65号－ | | 37頁 |
| 7 | トピックス | | 40頁 |
| | ① 雛人形展記念講演会：「青い目の人形」と答礼人形「筑波かすみ」
「筑波かすみ」里帰り事業と根本正との共通点 | | |
| | ② 『不屈の政治家根本正伝』を増刷しました | | |
| | 編集後記 | | 45頁 |

【お知らせ】 平成23年度總會について

日時 平成23年5月22日(日) 14:00～15:00
会場 那珂市中央公民館 2F講座室

※ 總會終了後講演会を予定しています。 15:00～16:00

昨夏は日中出歩けないほどの猛暑に見舞われ、今冬は近年稀に見る降雪と厳しい寒さになりました。これも地球温暖化の影響でしょうか。お互いに健康に留意されますよう希望致します。

根本正顕彰会も平成9年に発足して約14年になります。会員の皆様及び地域の皆様のご支援・ご協力により順調に事業を進める事が出来ました。厚く感謝を申し上げますと共に今後ともご指導の程よろしくお願い致します。

今年度の事業を振り返ってみますと、5月の総会では白石禎彦様から『祖父白石禎美と根本代議士』という演題で貴重なご講演を頂きました。

6月の公開講座では小林茂雄理事から『根本正と教育』というテーマでお話を頂きました。根本正は「教育立国」を目指し、教育を大変重視しました。小林理事から豊富な資料を下に根本正の果たした国家的役割について発表を頂きました。また、参加者の意見交換も活発に行われました。今年2月の公開講座では根本正の地元である増子副会長の発表がありました。テーマは『根本正と教育』—その2—でした。内容は特に「根本正の家庭の教育環境」を中心に発表頂きました。つまり根本正という偉大で不屈の政治家が、どの様な環境で生まれ育ったのかという別な視点からのお話で興味津々たるものがありました。

10月には、ふれあいセンターよしのを会場に平成22年度『根本正顕彰フェスティバル』を開催しました。今回は昨年の五台地区から始まったフェスティバルに続いて第2回目で、戸多・芳野・木崎地区を主な対象に実施しました。身近なところに素晴らしい政治家がいたとは知らなかった。学校でもしっかり指導してゆきたいとか、このような活動に感謝しますなどの意見が出されました。地域を回ることにより根本正の素晴らしい生き方を知って頂ければと思っております。

同じく10月には『根本正ゆかりの地を訪ねる旅』を実施しました。テーマは『根本正と田中正造』です。田中正造は我が国の公害の原点と言われた「足尾鉍毒事件」の時、農民の側に立って明治政府と闘った政治家として知られています。両者の接点はどのようなところにあったのか。これは大きな関心事でした。バスの中で「田中正造」(仲田副会長)、「根本正代議士と田中正造代議士」(仲田昭一事務局長)、「渡良瀬遊水池と足尾鉍毒水問題」(會澤)の説明のあと、田中正造記念館及び関係の寺院・遊水池などを見学しました。両者の関係は未成年者喫煙禁止法では分かっていましたが、明治34年12月10日、明治天皇に鉍毒被害を直訴して、麴町警察署に連行された時、根本正はまっ先に駆けつけ5円の見舞金を渡していたことを知りました。まさに人権を重視した根本正の一端を見る思いがします。

11月には『根本正と教育』というテーマで公民館まつり(19~21日)にも参加し、多数の来場者がありました。

会報も64・65・66号を発刊致しました。会員の皆様出来るだけ顕彰会の事業や新しい情報、新しく発掘した史料を掲載しておりますのでご活用いただければ有り難いと思います。

また、総会でご承認を受けた『不屈の政治家根本正伝』も残部が殆どありませんので増刷(1000部)させていただきました。会員の皆様には友人・知人などにご紹介いただければ幸甚に存じます。

平成22年度第2回公開講座開催される

日時	平成23年2月13日(日)	午後2時から午後4時まで
会場	那珂市中央公民館	参加者26名
テーマ	「根本正と教育」Ⅱ ー根本正の家庭教育環境ー	
講師(発表者)	増子輝雄副会長	

ある人物の生涯を考える時に、その出自や家庭環境を考えることは勿論であるが、その時々における教師など人物をはじめ書物、出来事などの出会いが大きく影響する。代表的な例としては、根本正が生涯の指針としていた「義公壁書」でも知られる水戸第2代藩主徳川光圀の生涯がそれである。光圀は第3子でありながら水戸藩主に就いたことへの煩悶、司馬遷の歴史書『史記』との出会いにより歴史書の重要さを強く認識し、自己の行く末を確立すると共に生涯の事業の一つとして『大日本史』の編纂に邁進したことなどである。



第1回の公開講座(小林茂雄理事の発表)に於いて、

- ① 那珂市から何故に根本正のような人物が出たのだろうか。
- ② 庄屋の子息は他の村に多くいたが、何故に根本正はアメリカ留学まで決意し、実行するなど他に抜きんじていたのだろうか。

など多くの疑問が出された。今回は、それらの疑問に答える意味で、増子副会長から「根本正の家庭教育環境」について詳しく解き明かされた。

【要旨】(詳しくは別添資料を参照)

1 生誕地東木倉村

- ① 南下は雄大な那珂川の流れ、小場江用水を利用した広大な水田地帯を見下ろすとともに、対岸の水戸城下を眺めては文化への憧れが沸々と湧き起こる。
- ② 生家周辺には、鎮守吉田神社がある。また、根本正が尊敬する徳川光圀が、明から渡来した心越禅師に命じて弟子呉雲に開山させた曹洞宗清水寺がある。そこには新鮮な湧水が昼夜を問わずこんこんと流れ出ている。
- ③ 清水寺の北方面には「清水原」と称された山林原野が広がり、かつては水戸藩の軍事訓練場・鉄砲場でもあった。武術訓練に励む藩士たちの怒濤・歓声を想起させる所でもあり、五台小学校の校歌にも詠み込まれている。

2 少年時代の生活

- ① 自然環境に恵まれた村落での生活は純な心を育んだ。祭礼を通しての人々との交流、動物や樹木・植物・野菜・草花など自然との触れあいや溜池・那珂川などでの水遊びは貴重なものであった。

生家は農家であり、そこには当然農業の実体験が存在した。

- ② 水戸とのかかわり

生家脇を通る街道の存在は多くの出会いをもたらし、人々との交流の場であった。まさに城下町水戸は生活圏であった。

- ③ 学問 根本正の生涯を考える上で、「塾」で学んだ意義は大きい。

庄屋を務めていた祖父半次衛門から学んだ読み書き、祖父半次衛門の孫への情愛・期待は大きいものがあつた（祖父と孫の情愛関係は一般的にも理解される）。9歳で神職の佐川伊豫之介塾に学ぶ。豊田天功の家僕となったことは天功に入塾したと同じである。20歳で上京し、蘭学者箕作秋坪の三叉学舎に入門、さらに翻訳者中村正直の「同人社」に学びキリスト教にも触れる。26歳でへボン塾に入門、翌明治11年（1878）に洗礼を受ける。これらの塾からは、明治初期の政治文化面を担った匆々たる人物が輩出している。

3 生誕地の地域に集結する教育施設

教育立国を目指し、青少年の健全育成に心血を注いだ根本正の精神に導かれたように、この「清水原」の地に五台小学校、県立水戸農業高等学校、県立那珂高等学校、茨城女子短期大学、ふれあいセンターごだいなど多くの教育施設が設置されている。また、これらの高校・大学に通う多くの生徒や学生たちは、根本正が敷設に尽力した「水郡線」を利用している。

さらにこの地域は、新那珂八景の一つとして「清水寺と五台文教地区」に指定されている。これらは全くの偶然ではなく、根本正が招き寄せたものとしか考えられない。

4 驚くべき事実、「教育ゾーン」の存在

- ① 三の丸地区＝根本正の生家から眺望できる水戸城跡を中心とするゾーン
水戸第一高等学校、水戸第三高等学校、茨城大学附属小学校、
水戸市立第二中学校、旧師範学校、藩校弘道館、旧県庁舎など
- ② 新荘地区＝根本正の師豊田天功の屋敷跡附近のゾーン
水戸市立新荘小学校、県立水戸商業高等学校、市立水戸高等女学校、
市立水戸第一中学校、旧水戸高等学校、茨城中学校・茨城高等学校、
祇園寺など

※ 増子輝雄副会長は、地元五台地区出身だけに体験談を交えながら根本正翁への思いを込めて理路整然と熱弁を振るわれ、多くの参加者に感銘を与えた。

【意見交換の要約】

- ① 生家脇の道路の果たした役割が大きいとの話があった。その道路の道筋を確認したい。

水戸街道筋（国道 118 号）とは別ルートで、城下から渡里村の「渡し」を渡って福田村や菅谷村・太田方面など北へ向かう主街道であった。人的交流もあり情報源であったと思われる。現在、根本正生家に江戸時代末期の絵図が保存されている。それによってさらに細かく確認されるとよい。

- ② 神官佐川伊予之介に学んだことについて更に知りたいが。

父徳孝は水戸藩の大学者豊田天功と従兄関係にあった。豊田家は旧里美村にあり、高萩の佐川神官との交流が考えられる。また、当時の鎮守吉田神社の神官は青柳村の鹿島香取神社の神官小川修理であり現在でも同じである。当時の水戸領内の神官連合は強固であった。同じ神官同士として小川・佐川の交流も考えられよう。さらに、未だ確かではないが、佐川が水戸へ出てきていたことも想定される。佐川の塾が高萩であったか水戸周辺であったかは今後の課題でもある。

- ③ 根本正が水郡線敷設に尽力された話があったが、根本正は東木倉出身であるの、顕彰する胸像が太子駅前であって地元菅谷駅前などに無いのはなぜか。根本正の尽力によって開通したのは（常陸）大宮から以北郡山である。

水戸から菅谷・鴻巣を通して（常陸）大宮までは当時私鉄の「水戸鉄道会社」が敷設していたのであって、根本正の尽力は地元には及んでいなかった。

- ④ 水郡線を利用して通学する生徒・学生と地元の人達との関係について伺いたい。

根本正の影響もあって教育ゾーンとして立地する五台地区の役割は大きい。通学してくる生徒・学生は勿論地域の安全安心を確実なものとしていきたい。そのような信念を持って、地元民としては組織化をはかって日々活動している。組織化は各地に起こっているが、この地区は 30 余年前からである。文教地区に生活しているとの認識は皆高く持っていると思う。

- ⑤ 庄屋の息子であった根本正が、士族となっていた豊田天功の指導を受けることになったが、そこでは得た大きなことは何であったろうか。

・人生の指針となった「義公壁書」をはじめとする水戸の学問は当然であろうが、「武士と農民との大きな差」を痛感したこともあろう。後年、「自分は草履、先方は下駄」、「自分は侍に土下座をしなければならない」など回想している。



その背景があったからこそ、キリスト教の説く「すべての者は神の下に平等である」の教え驚嘆したのではなかったか。非常に新鮮な教えと感じたことは確かであった。やはり、豊田天功門下生となったことは大きな出来事であったと思える。

⑥ 人物関係についての提言

- ・ 根本正の夫人羽部徳子は幕末の勤王運動家桜任蔵の孫と云われているが、その事実についてさらに検討・調査をしていきたい。
- ・ 根本正が東京に出た後に藤田東湖の子供建次郎の世話を受けている背景について。建次郎の妻は豊田英雄の姉妹にあたる立子^{りっご}である。根本正は豊田天功の長子小太郎にも師事しており、小太郎の夫人英雄とも接していた。これらの関係もあって、東京に出た根本正が藤田健の世話を受けることになったと思える。

顕彰会としての今年度の研究テーマは「根本正と教育」についてであった。その発表となる公開講座、第1回目の発表内容は教育改革の具体的な内容であった。それらは、民主党政権に変わって打ち出されている「子供は国家の責任で育てる」との理念に通じるものでもあった。国家が果たすべき内容と、単に与えるだけでなく、きちんとした将来果たすべき能力を求める両面の責務を学ぶことが出来た。

また、前回は、「根本正と豊田家との関係の意義がクローズアップされた。機会は平等に与えられているのに、それをものにしていく力は何かを痛感させられた。」との感想を持った。

今回、根本正の家庭環境を学んでみて、次男であるがゆえに出来る自由な発想、祖父母・両親の期待と家族が提供できた恵まれた人的環境を再認識した。人的環境・自然環境、地理的環境などがあいまって、根本正の苦難を克服する粘り強い力、新鮮な感覚・優れた感受性が育まれていったことを学ぶことが出来た。

現在でも、根本正の精神が増子副会長をはじめ地元の方々に脈々と受け継がれて、誇りを持って日々の活動に活かされていることを嬉しく思うことである。本日、地元からの参加者が多かったことがそれを示している。

参加された皆さんとの間で、活発な意見交換できたことに感謝します。

(事務局)

平成 2 2 年 度
第 2 回 公 開 講 座

平成 2 3 年 2 月 1 3 日 (日)

那珂市中央公民館

発表者 根本 正顕彰会

副会長 増 子 輝 雄

テーマ 「根本 正と教育」その 2

— 根本 正の家庭教育環境 —

1. 生誕地附近の環境
2. 少年時代の生活と学問
3. 教育政策と青少年育成
4. 生誕地の地域に集結する教育施設

根 本 正 顕 彰 会

1. 生誕地附近の環境

- (1) 根本 正の生家である東木倉台地の南下には、広大な水田が広がっている。

そして、その先的那珂川まで続いている。那珂川を渡ってすぐの水戸城下の上市あたりまでは約4キロ（1里）程である。

- (2) 生家周辺には、東側すぐのところに村社である「吉田神社」がある。そして北側へ約200mほどのところに清水が湧き流れる「清水寺」がある。清水寺は曹洞宗の寺で、うっそうとした森に囲まれ、杉の大木、弁天池があり地元で親しまれ昔から多くの参拝者が訪れている。

また、清水が湧き流れる水をためた「東木倉のため池」がすぐ近くにあり、このため池は「上ため池」「下ため池」と2段になっている。昭和年代の初めごろまで上と下と2機の水車が動いていた。

（清水寺については別添の関係資料4ページを参照）

- (3) 清水寺から北方面一帯（現在の五台小学校・県立水戸農高周辺）は松林、原野が広がり、「清水原」として広大な面積であった。清水原には水戸藩徳川斉昭時代に城外武術訓練所（鉄砲場）があった。

2. 少年時代の生活と学問

(1) 生活

[生活について = 生家の現当主 「根本喜代寿氏」の談]
— 昭和初期の思い出 —

① 自然の中で育まれる

- ア 神社・寺などの祭礼、諸行事、日頃の遊びごとなど
- イ 水遊びなど（東木倉ため池、那珂川が主体）
- ウ 魚・どじょう・しじみとりなど
- エ 清水原での、グミ・しどみ・栗・きのことり、小鳥とりなど

② 水戸とのかかわり

- ア 生活用具・用品等買い物はほとんど水戸であった
（主に上水戸馬口労町、大工町方面）
- イ 水戸桂岸寺（二十三夜尊）、水戸八幡宮の祭礼・縁日等には頻繁に通った
- ウ 水戸に近いため、水戸のうごきなどはすぐに伝わってきた

③ 農業の手伝い

- ア 田植え、稲刈り、脱穀、畑仕事、草取りなど
- イ 小学校時代は、春・秋に農繁休暇があり農業の手伝いをした

(2) 学問

- ① 6～7歳頃、祖父より読み・書きを学ぶ
- ② 9～12歳頃、神主である佐川伊豫之介の塾に学ぶ
（佐川伊豫之介については別添関係資料7～8ページを参照）
- ③ 13歳の春に水戸に出て、豊田天功の家僕となり19歳頃まで水戸で働きながら学ぶ
＜ 16歳のとき水戸藩南御郡方の役人となる ＞
（豊田天功・小太郎・英雄については別添関係資料9～11ページを参照）

以下20歳で上京し、働きながら次の塾などで学ぶ

- 東京 = 三又学舎、中村正直の同人社
- 横浜 = ヘボン塾

3. 教育政策と青少年育成

(1) 主な教育政策

- ① 国民教育授業料全廃建議
- ② 小学校教育費国庫補助法案提出
- ③ 国字国語国文改良の建議
- ④ 商科大学設立の建議
- ⑤ 帝国学制案建議

(2) 青少年育成関係

- ① 未成年者喫煙禁止法案提出
- ② 未成年者飲酒禁止法案提出

4. 生誕地の地域に集結する教育施設

根本 正の向学心の基礎が築かれた生誕地、東木倉の清水原には現在教育施設が集結し多くの青少年が学んでいる。そして、これらの多くの学生たちが、根本 正が尽力して敷設された「水郡線」を利用して通学している。

教育立国をめざし、青少年の健全育成に心血を注いだ根本 正の精神が、この地に導かれたように、生家からわずか200メートルの地点に、五台小学校が明治22年に創立されてから（大正14年に火災により焼失し、翌大正15年に現在地に移転した）大正・昭和・平成の時代へと続き、次々と教育施設が設置された。

現在この地域は、新那珂八景の一つとして「清水寺と五台文教地区」に指定されている。

（五台地区清水原に集結する教育施設については、関係資料12～14ページを参照）

ま と め

1. 自然環境

山野・川水・神社・寺・景勝等自然環境に大変恵まれ、豊かな心が育まれたものと考えられること。

2. 地理的環境

水戸に近く、生活面でもかかわりが深く、年少にして水戸に出る環境が整っていたこと。

3. 家庭環境

祖父 = 庄屋を務め、学問的素養があったこと。
農家の次男である 正 に学問的期待をかけたと考えられること。

父 = 教育熱心で、神官佐川伊豫之介塾に学ばせていること。
水戸に出て学ぶことに賛意し、推し進めたものと考えられること。

母 = 子女教育にも尽力したこと。

※ 水戸とのつながりは、根本家は庄屋を務め、水戸徳川家との結びつきがあり相当信用されていたこと。

4. 教育人脈

佐川伊豫之介

水戸城下青柳の鹿島香取神社と、生家すぐ近くの東木倉吉田神社の結びつきによる人脈が考えられること。

豊田天功

父親と従兄弟関係にあったこと。

5. その他として

根本 正の教育精神が今に導かれたように、生誕地域に教育施設が集結し、多くの青少年が学んでいること。

関 係 資 料

(公 開 講 座)

- | | | |
|--|---|-------|
| 1・ 根本 正の生誕地「東木倉・清水が原」
《その精神が伝わるような文教地帯》 | P | 1～2 |
| 2・ 地名 = 東木倉・清水原（教育施設の充実） | P | 3 |
| 3・ 清水寺について | P | 4 |
| 4・ 根本 正「青少年時代の年表と主なできごと」 | P | 5 |
| 5・ 根本家と豊田家・藤田家等関係略図 | P | 6 |
| 6・ 佐川伊豫之介について | P | 7 |
| 7・ 佐川愛廣頌徳碑 | P | 8 |
| 8・ 根本 正と水戸学 | P | 9 |
| 9・ 根本 正と豊田天功・小太郎・英雄 | P | 10～11 |
| 10・ 五台地区「清水原」に集結する教育施設 | P | 12 |
| 11・ 教育施設が集結する五台地区周辺図 | P | 13 |
| 12・ 五台小学校校歌・旧応援歌（旧校歌） | P | 14 |
| 13・ 「根本 正の家庭教育環境」別添写真 | P | 15 |

根本 正の生誕地「東木倉・清水が原」

《その精神が伝わるような文教地帯》

根本 正顕彰会

副会長 増子 輝雄

根本 正の生まれた那珂市東木倉地区を見てみたい。

生家の前の道路は狭く、特に生家から南の水戸方面に向かう下り坂は、両側に樹木がうっそうと繁り車の交換ができない昔のままの道路である。

生家の東側すぐの所に水田用水のため池（東木倉ため池）がある。生家から道路を挟んで左側すぐのところには旧村社であった吉田神社がある。生家の西側は広大な畑である。

また、北側に向かって（今の五台小学校方面）200M程進むと坂を下り、水田を挟んで坂を上ったところに清水寺（地元では「清水の観音様」といわれており、以下この名称を使用する）がある。

清水の観音様は曹洞宗の寺で、うっそうとした森に囲まれ杉の大木、弁天池があり今でも鯉が放たれ地元民に親しまれ多くの方が参拝に訪れている。

清水の観音様から西北400M程の地に五台小学校がある。このあたり一帯が「清水が原」として松林、原野が広がっていたところである。現在は五台小学校、茨城女子短大（旧五台中学校跡地）、水戸農高が立地し実に広大な面積であり、すぐ近く的那珂高校、茨城学園、ふれあいセンターごだいを含めて市内きっての文教地帯として活気を帯びている。

一方、生家から水戸方面に向かって200M程坂を下ると、広大な水田で那珂川を挟んだ向こう側は水戸市内である。ここから水戸市上市の二十三夜尊（桂岸寺）あたりまでは約4キロ程である。

このあたりは現在、大部分の道路は昔のままの状態と思われるが、ため池は整備され、清水の観音様付近は現在近代的な公園化に向けて整備中であるが、それでも随所に昔の面影が残されている。

さて、旧五台村の後台地区に生を受けた私は、終戦直後の昭和21年4月に五台小学校に入学した。当時の小学校は松林に囲まれ、周辺にはほとんど人家はなく現在の水戸農高、茨城女子短大の地は松林と原野であった。わずかに現在の水戸農高の生徒寮、果樹園あたりが畑地で大麦、小麦などが栽培されていた。小学1年生の春の遠足は清水の観音様であった。学校から清水の観音様までは人家が1軒もなく周りは畑と山であった。清水の観音様は体操の時間、図画の時間の写生など何回となく足を運び分教場みたいに大変馴染んだ場所であった。

小学4年生頃になると、旧五台村内でも最も水がきれいだといわれていた、東木倉のため池に根本正の生家の前を通ってよく泳ぎにいった。

特に5年生の時の夏場には、授業が終わると先生が先頭にたって泳ぎにいき、「うば貝」を採ったり、また、ため池下の後藤さん宅の前に小川が流れていて「しじみ」が採れたものである。後藤さん宅には同級生がいたので安心して「しじみ」採りができた。

そして6年生の時に根本正生誕100周年記念行事が、五台中学校で開催された。そのとき初めて先生から根本正のことを聞かされた。根本正は東木倉生まれで水郡線を作った立派な人で、郷土の誇りであり大子町に胸像が建てられていることも聞かされた。記念行事では根本正の少年時代を劇で演じたことを覚えている。また、清水が原の一角であった現在の水戸農高運動場あたりの松林、原野では、夏は「グミ、しどみ」など、秋は「栗、きのこ」などを採り多くの楽しみがあった。

中学生になると、学校の近くに細割商店という駄菓子等売る店ができたので、菓子、パンなどを買い清水の観音様にいってよく食べたものである。清水の観音様は夏は涼しくきれいな小川も流れていて心が癒される場所でもあった。また根本正の生家にも興味をもって何回か家の前まで見に行ったことがあった。

根本正は今から159年前の1851年に東木倉の地に生まれ、今の小学校六年生位の年代までこの地で過ごした。当時と今では地形、建造物、自然環境等大きく変わっているとは思われるが、少年時代の生活は、私共が昭和20年代に自然とともに歩んだ姿とは、そんなに大きく変わっていなかったのではないかと思われる。

当時は学校制度がないため、根本正は6～7歳の少年時代祖父から読み、書きを習った。そして10歳の時、神職の佐川伊豫之介先生の塾に学び、学問に興味を覚えたのであろう13歳の春に、さらに上をめざして故郷を離れていったのである。

恵まれた自然の中で豊かな心が育まれ、向学心の基礎が築かれた根本正の生誕地東木倉清水が原、ここには現在教育機関が集結し多くの青少年が学んでいる。そしてこれらの交通手段として相当の生徒が、根本正が地域発展のため尽力して敷設された水郡線を利用しているのである。

教育立国をめざし、青少年の健全育成に心血を注いだ根本正の精神が、故郷生誕地に導かれているような気がしてならないのである。

地名「東木倉・清水原」～教育施設の充実

ひがしきのくら 東木倉〈那珂町〉

那珂川下流左岸に位置する。先土器時代～縄文時代の東木の倉遺跡がある。文禄4年7月16日の佐竹義宣知行充行状写「一、百五拾石也〈那賀郡内〉東木倉の内」と見え（大縄嘉兵衛文書／家蔵文書）、佐竹氏家臣大縄氏の知行地であった。

〔近世〕東木倉村 江戸期～明治22年の村名。常陸国那珂郡のうち。はじめ佐竹氏領、のち慶長14年からは水戸藩領。村高は、寛永12年「水戸領郷高帳」297石余、「元禄郷帳」271石余、「天保郷帳」293石余、「旧高簿」403石余。「水府志料」によれば、常葉組に属し、戸数15、村の規模は東西4町余・南北8町余、小場江用水の用水渠（長さ242間）がある。神社は吉田明神（新編常陸）。明治4年茨城県、同11年那珂郡に所属。明治22年五台村の大字となる。

〔近代〕東木倉 明治22年～現在の大字名。はじめ五台村、昭和30年からは那珂町の大字。明治24年の戸数43・人口301。昭和42年大成学園茨城女子短期大学設立。昭和36年一部が水戸市中河内町・柳河町となる。

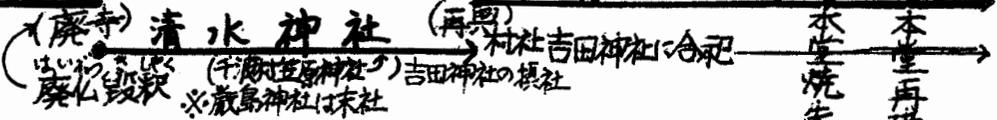
しみずっぱら 清水原〈那珂町〉

那珂町南部の五台地区にある原。標高30m前後で那珂台地の一部をなす。南側は段丘崖をなし、そこから広大な沖積平野が広がって、両者の境界付近を小場江用水が流れる。「水府志料」後台村の項に「林野 拾七町歩余有。中台、東木倉、西木倉、豊喰等大方入会の地にして曠野也。都而清水原と云。府下の土此野に出て火矢、烽燧等の火術を学ぶ所とす」とある。徳川斉昭の時代には練兵場・射撃練習所であった。中台北部には明治末頃まで長さ200mの土塁があり鉄砲場とよばれていた。明治期には草刈入会地をめぐる、那珂川沖積低地の坏が方の中河内郷・下国井・西木倉など5か村と台地上の野方郷の東木倉・五台・豊喰郷村など4か村との間に争いが起こり、明治14年に県知事に調停を申請したが解決まで数年を要した。これを清水原事件という。現在は水戸市の近郊地域として都市化が進み、高校や短期大学も進出し、文教地区を形成。

教育施設の充実 当町域からは、根本正のように、アメリカの大学で学んで帰国した後、明治31年から大正13年まで、36年間代議士として活躍し、「国民教育授業料全廃の建議案」「小学校教育費国庫補助法案」を提出して議決させた人物も出ている。明治41年菅谷村ほか10数か村で、学校組合として菅谷農学校（乙種）が設置された。財政的理由で大正11年廃校となるが、那珂・久慈・東茨城各郡から多くの子弟が学んだ。第2次大戦後の学制改革により中学校は創立されたが、高校以上の教育機関はなかった。昭和42年、東木倉に大成学園茨城女子短期大学が設置されたことは、当地の教育・文化の向上に刺激を与えることとなった。同45年県立水戸農業高校が西木倉に移転し、農業教育推進の上で大きな展望を開くこととなった。

（那珂川川岸地名大辞典より）

(水戸祇園寺の末寺として建立)



清水洞の上・清水寺について

- ① 水戸の祇園寺 水戸市八幡町にある曹洞宗の寺。徳川光圀の請いによって天和三年(二六八三)明の心越が開山。
- ② 白衣観音 白衣をつけ、白蓮華の中にいる観音。わが国では三十三観音の一つ。
- ③ 山城の音羽麓山城(京都)の清水寺は音羽山と号す。寺のすぐ近くにある滝。
- ④ 神社局 祭祀・諸社・諸陵・宣教・祝部 神部に關する事務をつかさどる部局。

この辺りは「清水洞」と称され、古来清水がこんこんと湧き流れている。江戸時代、徳川光圀公の招きで水戸の祇園寺を開山した東臈心越禪師の高弟吳雲宝曇禪師が、元禄一〇年(一六九七)、この地に祇園寺末寺となる曹洞宗清水寺を建立したという。

本尊は白衣観音で、心越が明から日本へ亡命の時、杭州永福寺の観音を持参したものと伝える。世人の信仰深く、ことに婦人は講を結び、安産を祈り報恩の供養をした。その頃、光圀公はこの辺りの情景を山城の音羽瀧とやらにかわらぬとして、

愛もまた 国こそ替る山城の心の住める おなし清水

- ⑤ 木花開耶姫命 大山祇命の女。山・富士山の神株。
- ⑥ 弁財天 吉祥天とともにインドで最も尊敬された女神。わが国では七福神の一人として信仰された。
- ⑦ 厳島神社 瀬戸内海六島の厳島にある元宮幣中社。市杵島姫命が主宰神。

と、詠んでいる。これは、この地の人々は京都の清水寺に行くことが出来ないで、同じ清水の地に清水寺を建立して近隣十八か村の農民が参詣できるようにしたと伝える。

その清水寺も明治二年(一八六九)旧藩神祇局の命により廢寺となった。その跡へ、千波村笠原神社から木花開耶姫命を分祀し清水神社とした。また、境内清水池の中には、弁財天に代って市杵島姫命を祀る厳島神社が末社として建てられた。当時の景観を表して『那珂郡郷土史』には、

池は水量豊かに此所彼所に湧出清澄鏡の如く列なること氷の如し三伏猶暑さを知らず老樹水に臨み真に仙城たり水流れて落下するを雙瀧といふ

- ⑧ 洲なること 寒くて冷えること。
- ⑨ 三伏 夏の極暑の期間。夏至後の第三の庚の日を初伏、第四の庚の日を中伏、立秋後の第一の庚の日を末伏という。

その後、明治四三年(一九一〇)清水神社は、末社厳島神社と共に村社吉田神社に遷宮合祀され、元の地に清水寺が再興された。大正一〇年一月には本堂が焼失し、昭和七年(一九三二)七月に再建された。本尊の白衣観音は、再建時の住職他界後行方不詳となり、現在は元茨城学園長安原氏から寄進された観音菩薩である。なお、現在は無住寺で区が管理している。

境内清水池の側に、昭和四九年那珂町指定天然記念物「清水寺の杉」がある。清水寺北側一帯はかつて清水原といい、水戸藩徳川斉昭時代には、城外武術訓練所(鉄砲場)があった。

この地域は現在、歴史のある清水寺や溪谷、大学、高校、小学校を控え、新那珂八景の一つ「清水寺と五台文教地区」に指定されている。

水戸市史編纂委員会

根本 正「青少年時代の年表と主なできごと」

西 暦 (年号)	年 齢	根本 正 関 係	国内の主なできごと
1851年 (嘉永4年)		東木倉村(現 那珂市東木倉)に生まれる	アメリカ ペリー艦隊が浦賀に来港(1853年)
1857~8年 (安政4~5年)	6~7歳	祖父より読み・書きを学ぶ	
1860年 (万延元年)	9歳	神主 佐川伊豫之介の塾に学ぶ	桜田門外の変(1860年)
1863年 (文久3年)	12歳	豊田天功の家僕となる	
1864年 (元治元年)	13歳	豊田天功死去 子息豊田小太郎に仕える	藩内抗争 天狗・諸生の乱 水戸「天狗党」として西上し、加賀藩に降伏(1864年)
1865年 (慶応元年)	14歳	豊田小太郎京都で暗殺される	武田耕雲斎・藤田小四郎ら 352名処刑される (1865年)
1867年 (慶応3年)	16歳	水戸藩南御郡方役人となる	大政奉還(1867年)
1868年 (慶応4年)	17歳	水戸藩東御郡方奉行服部潤次郎からパリ万博土産の時計とマッチを見せられ、カルチャーショックを受ける	
1869年 (明治2年)	18歳		諸生党の重鎮 市川三左衛門処刑される (1869年)
1871年 (明治4年)	20歳	役人を辞めて上京し、働きながら学ぶ 以下アメリカ留学へと続く	

佐川伊豫之介について

1. 佐川伊豫之介（諱は「愛廣」 伊豫之介は通称）

- (1) 天保元年（1830年）多賀郡高岡村大能（現高萩市大能）に生まれる。
- (2) 明治34年（1901年）没 71歳。
- (3) 伊豫之介の生家は今は無く、近くに墓地がある。
- (4) 大能村（明治22年高岡村となる）は、江戸時代以来「水戸藩の馬産地」としての歴史がある。

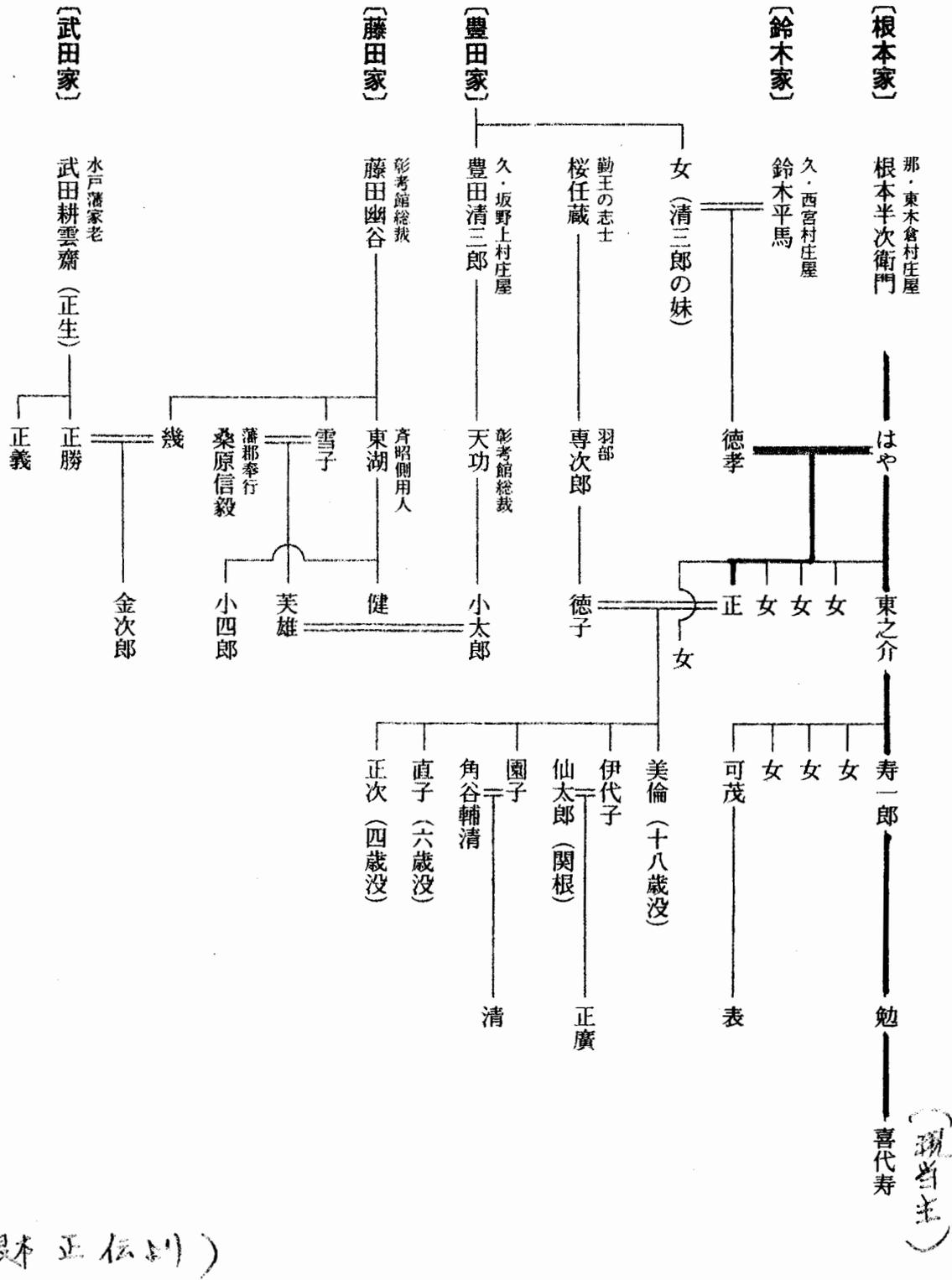
2. 佐川愛廣頌徳碑

- (1) 所在地 高萩市高萩字滝坂 滝坂神社前（県立高萩高校入口）
- (2) 明治41年（1908年）先生を慕う門人たちが建立
- (3) 頌徳碑の撰文ならびに篆額及書とも根本 正が担う
- (4) 碑文に「執替小川修理、後遊水府史館総裁豊田天功」とあり、先生は水戸城下青柳の小川修理（鹿島香取神社神官）に入門指導を受け、さらに、彰考館総裁豊田天功にも学んでいる。
郷里の大能村を出て、水戸周辺に住み前記のように学び、塾を開いていたものと推測される。その場所については明らかでない。

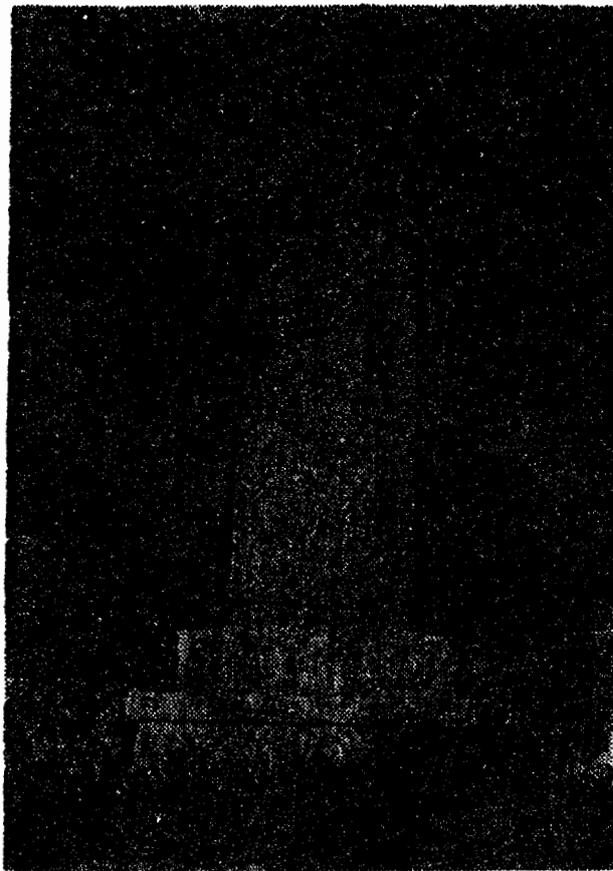


高萩市大能 佐川家・愛廣・秀子夫妻の墓

根本家と豊田家・藤田家等関係略図



佐川愛廣頌德碑



第9圖 佐川愛廣頌德碑

鞠「養育す」
 執「入門す」
 下唯「開塾す」
 所表「墓道に建てる石碑」

小川修理「青柳」
 廣島「香取神社」
 神倉

佐川愛廣頌德碑 所在地 高萩市高萩字滝坂滝神社前

篆額 佐川先生之碑

佐川愛廣先生之碑

先生諱愛廣、通稱伊豫之介、佐川氏、常陸多賀郡高岡村、

人、父曰三刑部、母永山氏、(天保)天保元年二月十二日生、幼喪

父、母次侶三鞠之、執三贊小川修理、後遊三水府史館總裁豐田

天功、(明治)明治六年、爲三下手網村王塚神社等祠官、後下帷授

徒、先生爲レ人謹嚴、其率三子弟亦以レ嚴、善三詩文、三十四

年八月八日卒、娶三芳賀氏、生三二男二女、伯曰三翠芳、嗣

家、亦以三文學三名、叔曰三信、女長嫁三小泉氏、次嫁三大内氏、

門人追三慕先生遺德、(香取)香取樹レ碑、以三予當遊三先生門故、俾

人來請レ文、乃書レ之、以表三於其阡、

(明治)明治四十一年歲次戊申二月中澣

衆議院議員勳四等 根本正 撰并篆額及書

(明治二十年
 高萩市の地誌の
 資料より)

根本正と水戸学

水戸学との出会い 根本正の生涯に大きな影響を与えた水戸学、その学問との出会いについて根本は『回顧八十一年』の中でおよそ次のように語っている。

一三歳の時分に水戸の城下へ出で、豊田天功の家僕・家来となつた。天功は親の従兄弟に当たり、『大日本史』を編さんする史館「彰考館」の総裁であつた。「向こうは士族、私は百姓で下僕即ちいわば家来」の関係であつた。そのうちに天功先生が亡くなられので、お子さんの小太郎先生に学ぶことになつた。家来は下駄を履くことが出来ない。雨天の時には草鞋を履いてお供をする。士族が来れば、草鞋を脱いでお辞儀をしなければならぬ。大変な上下関係の違いがあつた時代、ちょうど元治元年（一八六四）のことであつた。

この頃、日本は開国・鎖国をめぐつて混乱を深め、水戸藩内でもその影響から天狗派と諸生派に分かれて対立が激しくなつていた。それはやがて元治元年（一八六四）の筑波山事件へと発展していった。この争乱は、天狗派においては武田耕雲齋の家族をはじめ多数の藩士が処刑され、反対に諸生派もまた家老市川三左衛門が逆さ磔にされるなど、残虐な仕打ちの繰り返しを生んだ。その対立は、領民をも巻き込んで、後々まで怨恨が残る負の遺産となつていくのであるが、そのような水戸藩の物騒な時代の中で根本は多感な少年時代を過ごしたのである。学問的にも、精神的にも、水戸は根本の一生に大きな影響を与えたのであつた。

義公様御壁書 さらにより具体的に光圀を尊敬していたことを示すものは、次のような「義公様御壁書」である。根本正はこれを名刺の裏に印刷し、自分の信念として多くの人々に示していた。

- 一 苦はたのしみの種、楽は苦のたねと知るべし
- 一 主人と親とは無理なるもの（従わねばならない）と思へ、下人は足らぬもの（物わかりが悪い）と知るべし
- 一 子ほど（子が親を慕うように）親を思へ、子無きものは身にた比べる（自分を他と比較し反省する）ちかき 手本を知るべし
- 一 おきてに怖ぢよ（よく守り）、分別なきものをぢよ（十分注意せよ）、恩を忘るる事なかれ
- 一 慾と色と酒とをかたきと知るべし
- 一 朝寝すべからず、咄の長座（長い無駄話）すべからず
- 一 小なる事は分別せよ、大なる事は驚くべからず
- 一 九分はたらず、十分はこぼると知るべし（常に最高を目指して努力をせよ。しかし、これで達成したと満足してはならない）
- 一 分別は堪忍にあるべしと知るべし（大事な事は人を許す広い心を持つこと）

（根本正伝より）

根本正と豊田天功・小太郎・英雄

豊田天功 根本正は文久三年（一八六三）一三歳のときに豊田天功の家僕となった。しかし、天功は翌元治元年（一八六四）一月二二日には没しているから、根本が直接天功から学んだ期間はごくわずかである。この時、天功の長子小太郎は三一歳、六月一日に大番組のまま彰考館総裁代役となっている。根本は、この天功・小太郎父子との出会いについて『回顧八十一年』の中で次のようにも記している。

史館の総裁というのは、大日本史の編輯へんじゅうをする一番上の役人であります。この人（豊田天功）は百姓からそういう偉人になった非凡の学者で、藤田東湖先生などより学問ができたと言う位で、東湖先生のお父さんの幽谷先生の弟子でありました。その豊田先生のお父さんが昔は百姓、私の父も百姓、そして父は豊田先生の従兄弟であるから、私がおそこへ家来になつて行つたのであります。そのうちに豊田先生が亡くなられたので、その息子さんの小太郎さんのお供をする。昔は、お父さんが亡くなれば士族は五十日間墓参りをしたもの、豊田家はやはり士族であるから、小太郎先生の家来である私も一緒にお墓へ毎日行く。そしてお供物をするのであります。

豊田小太郎 根本正は、「父の豊田天功先生からよりも、子の小太郎先生からの方がより多くの影響を受けた」と語っているが、その小太郎について大正一四年一月一七日付『茨城新聞』「英雄号」の中で根本が次のように述べているのはその表れであろう。

豊田小太郎先生は学識該博、英邁活発、勇氣に充ち、わずかに二十一歳にして蘭学研修を命ぜられたるに見ても、先生がいかに抜群の学生たりしかを知るに足りるであろう。二十二歳の時には小太郎の雷名を慕い、肥前（長崎県）の島団衛門、因幡（鳥取県）の安達志津馬等が来訪、蘭学の研精を求めたり。二十四歳の時には、藩主斉昭の命を奉じて蘭書『航海要録』を翻訳し、元治元年（一八六四）三十一歳にして六月一日に彰考館総裁代役を仰せつけられ、大日本史編さんの大任を實行したことなどは、世間をして嘆賞ちか措くあたわざらしむる所なり。

先生余に教えるに、「何事を為すにも敏捷びんせうにして、なかならず青年たる者は就職に急ぐべからず」と言われたことは、一身を俸禄によつて支配されず、自身の天分を發揮せしめよとの意味を教訓せられたものであつて、余の深く肝に銘じ常に実行しようとしたところである。

この豊田小太郎は天功の長男で天保五年（一八三四）三月生まれ、名を靖、通称を小太郎、香窓・十竹舎とも号した。嘉永三年（一八五〇）一八歳の時に弘道館に入って勉強する一方、水戸田見小路の小沢寅吉の道場で北辰一刀流の剣法を習った。翌四年福地政次郎に就いて砲術を学び清水原（那珂市東木倉周辺）での砲術演習に参加するとともに、那珂郡の山野でしばしば狩猟訓練に出陣して武術を磨いた。



豊田美雄 美雄は「日本の保母第一号」で知られる。幼児教育と女子教育に生涯をささげた偉大な女性である。美雄の父は

桑原信毅、母は藤田東湖の妹雪子。文久二年（一八六二）六月二八日、一八歳で豊田天功の長子小太郎に嫁した。根本正は、美雄八一歳の高齡祝賀に際して美雄についておよそ次のように語っている。

自分は、豊田小太郎先生の令夫人が二十歳の當時からその家に仕えていたので、美雄子女史が非凡の性質をもち、よくその賢母に孝行を尽くされ、その若く美しい当時にあっても、夜は深夜ま

で灯火をともして読書勉強されたことをよく知っている。美雄子女史の鋭敏にして篤学であることは天性でもあろうが、それを奨励したのは、親族皆卓見の名家でもあったからであろう。藤田幽谷は祖父であり、母は藤田東湖の妹である。吉田令世および久木直次郎の両夫人は叔母で藤田東湖の姉妹であり母の姉妹である。美雄子は幼少の時からこれらの人々と詩歌文章の交換をしており、自分はその書簡の使者として、まるで郵便配達のような役を務めたのである。…夫小太郎は慶応二年（一八六六）九月二日刺客にあつて死去、夫に奉仕したのはわずかに三年、以来六〇有余年間独立自営し、教育のために献身犠牲国家に尽力された勲功は実に偉大なことである（大正一四年一二月一七日付『茨城新聞』「英雄号」要約）。

※福地政次郎（1810～65）

水戸藩士（文化7年生まれ）
砲術神発流指南をつとめ、鉄砲頭・軍用掛、
神勢館長。元治元年天狗党の乱では、長男
の勝衛門とともに保守派の諸生党と戦い、
敗れて捕えられ元治2年4月5日切腹。

56歳

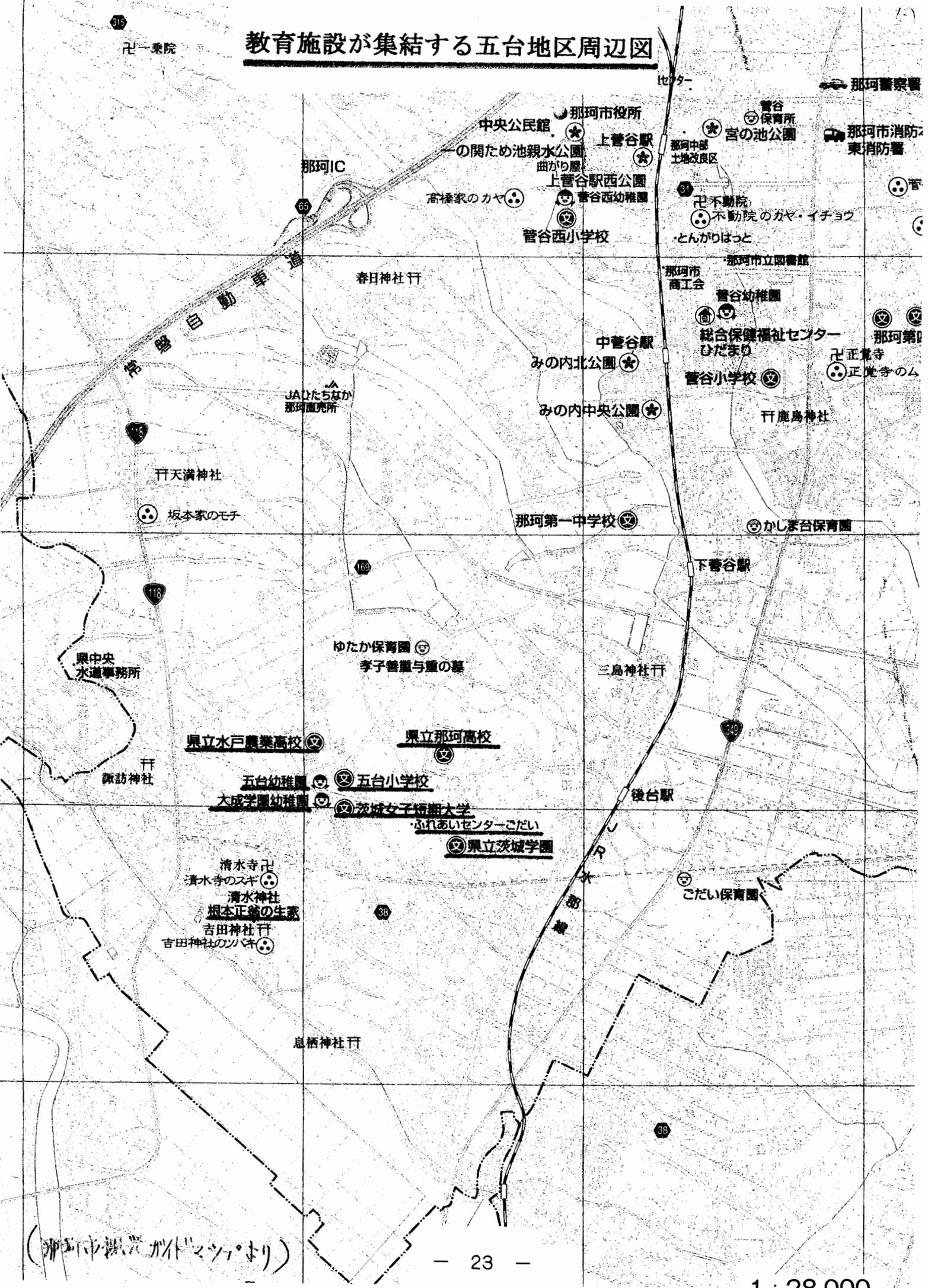
本姓は佐藤、名は広延

五台地区「清水原」に集結する教育施設

平成22年11月30日現在調

教育施設名	創立又は移転	生徒数	水郡線利用通学者	備考
那珂市立 五台小学校	明治22年 東木倉地内に創立 大正15年 現在地に移転	483名	—	
茨城県立茨城学園	明治43年 水戸市内に創立 昭和11年 水戸市より現在地 に移転	60名	—	児童自立 支援施設
茨城女子短期大学校	昭和42年 現在地に創立	170名	15～ 20名	
茨城県立 水戸農業高等学校	明治28年 水戸市内に創立 昭和45年 水戸市より現在地 に移転	900名	全学年で 243名	
大成学園幼稚園	昭和46年 現在地に創立	120名	—	
那珂市立 五台幼稚園	昭和49年 現在地に創立	35名	—	
茨城県立 那珂高等学校	昭和60年 現在地に創立	480名	全学年で 212名	
那珂市立 ふれあいセンター ごだい	平成21年 現在地に創設	—	—	地域交流 社会教育 活動拠点

教育施設が集結する五台地区周辺図



(那珂市観光ガイドマップより)

五台小学校旧応援歌（校歌として使用）

昭和15年応援歌として制定

1. 清水の園生空高く
松の緑の色も濃き
学びの校庭にいそしむは
六百有余の我が健児

2. 尊皇の道あきらかに
維新の功培いし
義烈二公にゆかりあり
その名ぞ崇き五台校

3. 協同自治の旗白く
至誠をもってつらぬきし
日頃鍛えしわがかいな
いざこころみんな我が身体

五台小学校校歌（現在）

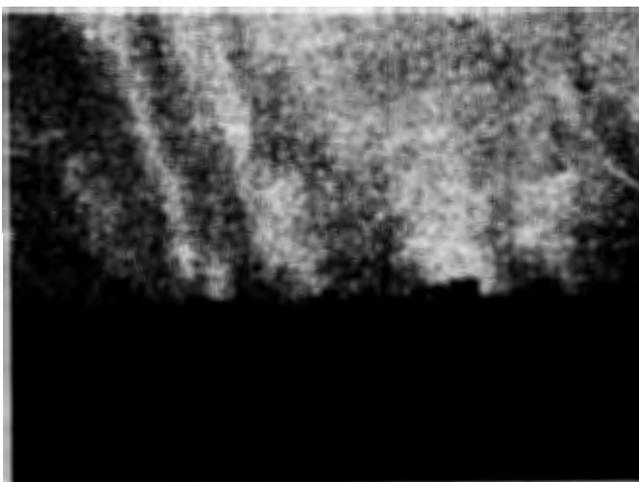
昭和38年制定

1. 清水が原の 麦青み
きれいな花よ かわいい小鳥
ぼくもわたしも 歌って跳んで
顔はかがやき 雄々しく強く
みんな健康 仲よく伸びる
2. 流れは豊か 那珂の水
実りの秋よ 「穂波は黄金」
ぼくもわたしも 学んでみがき
瞳はつぶら 賢くさとく
みんな勉強 まじめに励む
3. 野の果遠く むらさきに
筑波の山よ 望みの象徴
ぼくもわたしも 鍛えて練って
正しい道を見つめて守り
みんな明朗 そろって進む
松の緑も あざやかに
伸びゆく 五台小学校

「根本正の家庭教育環境」別添写真



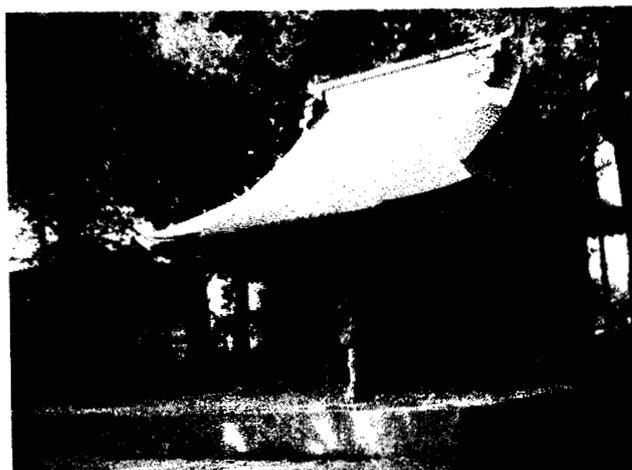
(生家附近の道路)



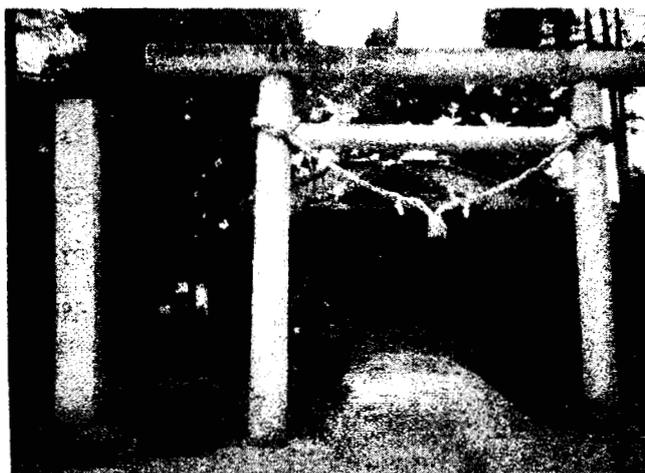
(台地より水戸方面を望む)



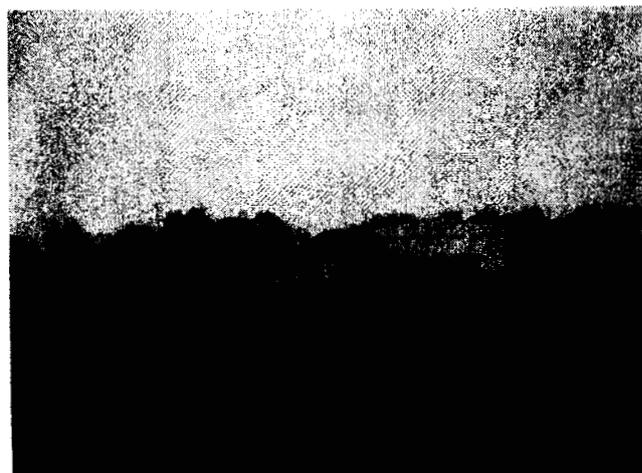
(東木倉溜池)



(清水寺)



(吉田神社)



(清水原の文教地帯)

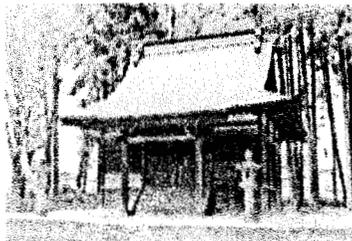
しみず どう うえ

「清水洞の上」の整備が進んでいます！

清水洞の上地区は、豊富な湧水がある池や山林、清水寺、また市指定の天然記念物の「清水寺の杉」などがある、豊かな自然が残る地域です。

那珂市では、本地区の整備を平成20年度から実施しています。平成21年度末までで第1次計画区域の大半を整備し、森林の間伐や木道および園路の整備、湧水池や観察池を整備しました。平成22年度は、トイレや駐車場の整備を予定しています。

また、地元の「清水洞の上自然を守る会」でも、物置を休憩所兼倉庫に改築して活動の拠点とし、東屋の整備をはじめ、地区内の草刈り作業や竹林整備など積極的に活動しています。平成22年度は、ほたる再生のための環境づくりやベンチ作り、こども広場の整備などを計画しています。



■清水寺



■湧水池



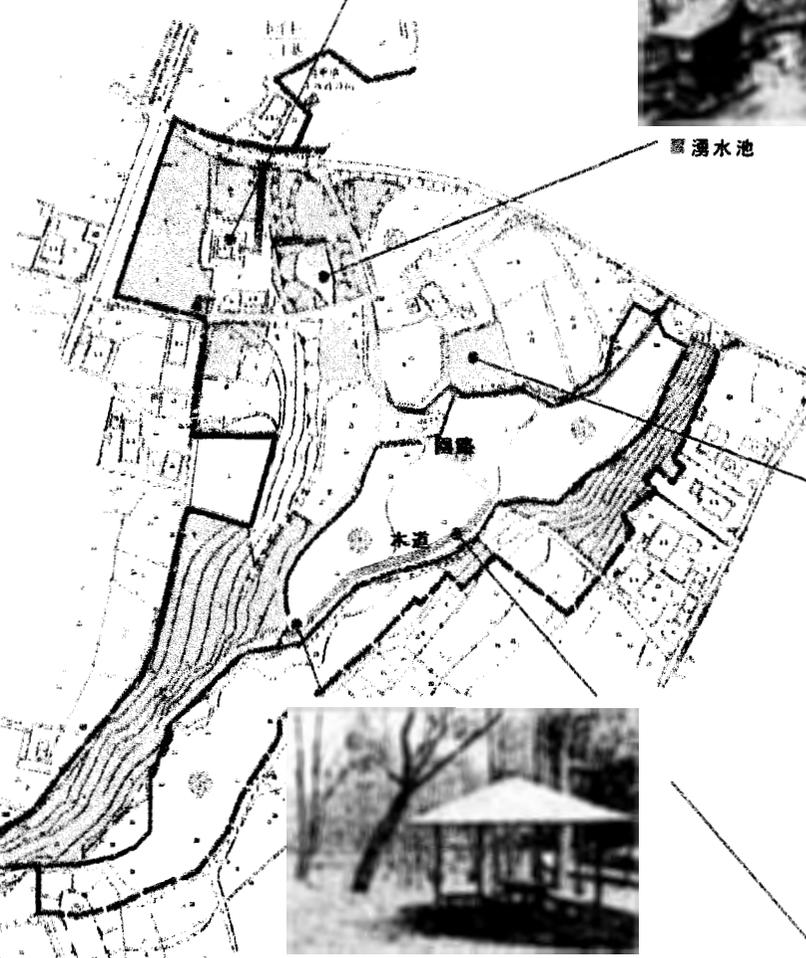
■観察池



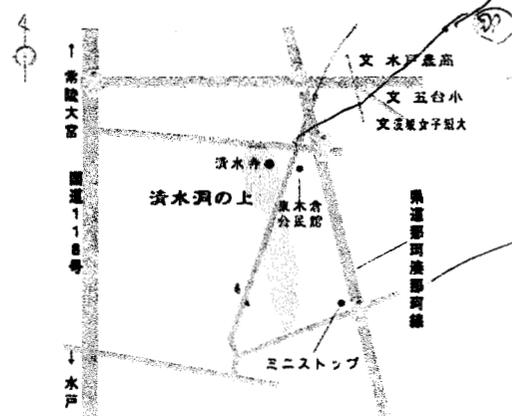
■木道



■東屋



清水洞の上 案内図



根本正先生は書を良くした。地元・茨城県の支援者の人々に多くの直筆のハガキや巻紙の手紙を送り、また禁酒運動の同志にも自作・直筆の和歌を送ったり、最晩年には未成年者飲酒禁止法を縦横約1メートル大の和紙に印刷し、そこに和歌を書き添えて送っている。小生はその独特の書体を先生独特のものだと初めは思っていた。しかし幕末の水戸藩の尊皇攘夷論を唱えて活躍した志士の書体には共通性があると思う。

徳川慶喜の曾孫である徳川慶朝著『徳川慶喜家によろこそ』(文春文庫、平成15年)の中に「烈公の手紙」という部分があり、徳川斉昭が子・慶喜に宛てた手紙について書かれており、手紙の写真が載っている。その説明に「およそ125通におよぶ膨大なもので、箱に入れて保管されていた。烈公・斉昭独特の「虎の尾」と呼ばれる筆づかいがみてとれる」と書かれ、文末の「也」の字の最後の部分が上の方に勢いよく跳ね上がっている。根本先生の手紙でも署名の「正」の字の最後が上方に跳ね上がっており、同様である。

診療所の目立たない場所に根本正先生の書「大義震天地」のカラーコピーを掛けてある。診療所へ通っていた高齢の書道の先生がその書を見て、「この書法は明の書家・傅山(ふざん)のものです」と言った。それをきっかけに明の二人の書家・傅山と王鐸について調べた。詳しくはここでは省略するが、中国では満州に起こった清が明朝を滅ぼし、中国を統一したのが1644年で、明の高官の多くが明朝の再興を期して野に下り、明朝に仕えた学者・朱舜水是1659年に日本の長崎に亡命した。彼は寛文5年(1665)水戸藩の賓客となり、藩主・徳川光圀の厚遇を受け、前期水戸学の形成に影響を与えたという。傅山も学者であり、明朝の遺臣として、清朝に反意を表し、郷里の田舎で書画の生活に明け暮れ、78歳で1684年に死去している。

一方、王鐸は文辞に巧みで明朝に仕え、清朝になると、「明史副総裁」など学者としての官職を歴任し、「明朝をののしった」という。1652年、61歳で死去している。書法は王羲之の系統を継ぎ、流麗で日本でもよく行草の手本とされている。

日本の書法(書体)は平安時代中期の和様の大成者・藤原行成を始めとして、鎌倉時代に入ると多くの書法が形成されたという。江戸時代になると幕府が公用書体に「御家流」を採用し、また寺子屋でもこの書法を教えるようになったことから、書法はこの御家流一系となり全国に広まった。

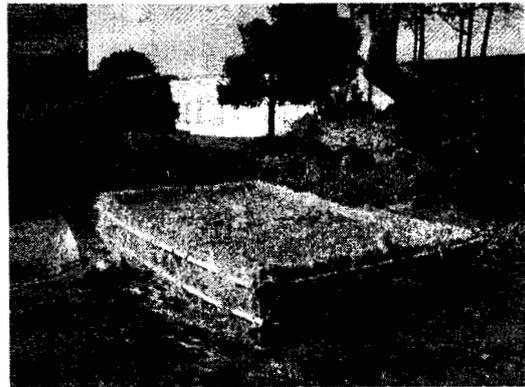
このお家流は王羲之の書風を継ぎ、王鐸の書法も同系列にある。

しかし朱舜水を師と仰ぐ水戸藩の指導部は王鐸の「生き方」を嫌い、彼の流麗な行草書体も嫌ったのではないか。傳山の言葉に、「寧ろ拙なるも功なるなかれ 寧ろ醜なるも媚なるなかれ 寧ろ支離なるも軽滑なるなかれ 寧ろ真率なるも安排なるなかれ」というものがある。水戸学では「文武両道」とは言わない。「文武不岐」という。文と武は二つのものではなく、同じもので、武に象徴される行動にも、拙・醜・支離・真率が重んじられ、功・媚・軽滑・安排は嫌われたと思われる。

かつて那珂市中央公民館で根本正展が開かれた時、同時に小学校の書道展が開かれていた。子ども達の書は画一的で、いわゆる王羲之流、行草は王鐸流の綺麗な書体ばかりである。「右にならえ」で、個性を重んずることない。全国的にも書道展は同じであろう。せめて水戸地方だけでも地元流である傳山流を取り入れたらと思った。画一的教育には多くの弊害があり、受験教育である。傳山流は個性重視である。個性重視は国際的人材の育成になり、これから必要な教育であろう。水戸藩内の寺子屋における「手習い」がどんな風であったか知りたいと思う。(3/2/2011)

根本正翁の先祖たちと「東木倉村図」

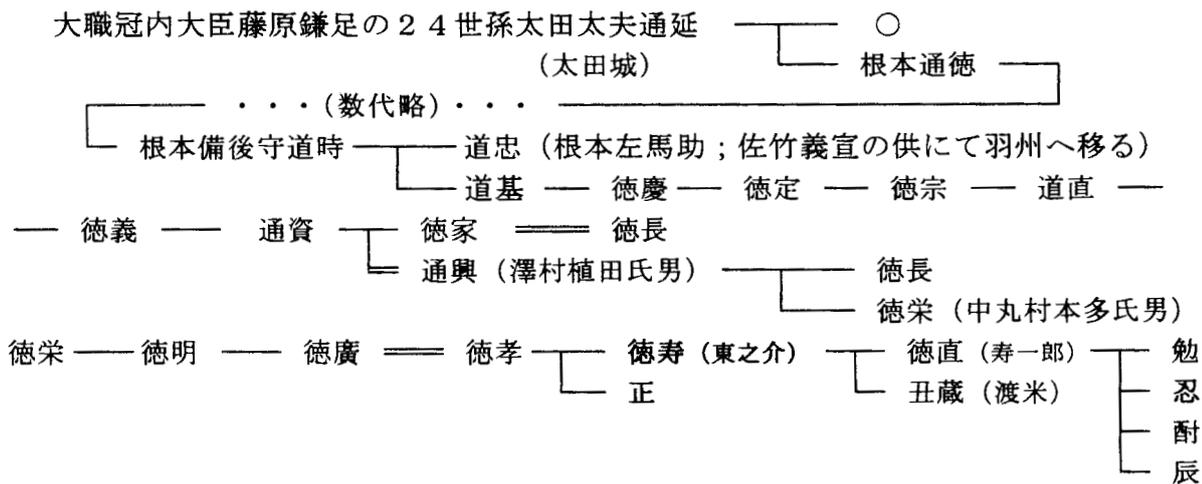
仲田昭一



平成23年2月23日（水）午後、根本正翁の生家である根本喜代寿さん宅を訪ね、根本家に伝わる「根本家系図」や「東木倉村図」などを拝見させていただいた。時に、根本家の庭先にある大きな梅の古木は満開（写真上左）、屋敷畑内にはこれから野菜の種を蒔き苗を育てる「苗床」が作られ（写真上右）、いよいよ忙しくなる春を迎える準備が着々と進められていました。以下、知り得た内容の一部を報告させていただきます。

（1）「根本氏系図」（根本喜代寿家所蔵文書）には

大職冠内大臣藤原鎌足の24世孫太田太夫通延
(太田城)

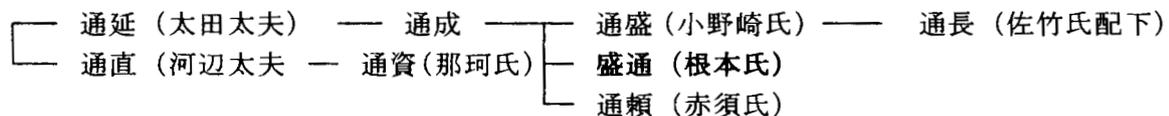


- ① 根本縫殿頭通徳＝太田郷の根本に住す、よって氏（根本姓）と為す。
- ② 道時＝天正5年（1577）、石神合戦に於いて討死にす（佐竹氏と石神小野崎氏の戦い）。
- ③ 道基＝根本市之丞、後に与左衛門。天正6年（1578）に東木倉村へ移る。
- ④ 徳慶＝与三右衛門、寛永18年（1641）の水戸藩検地の際に役方（案内役）を務める。

とある（「系図」については一部省略してある）。

通徳の時に太田の根本（現白羽町）に住んだことから「根本氏」を名乗り、道基の時の天正6年に東木倉村へ移住したことになる。その子徳慶の時に、水戸藩最初の寛永の検地に役方を務めていることから、庄屋など村役人を務めていたことが推定される。

なお、『常陸太田市史』では



とあって、根本氏の起こりについては別説が採られている。

(2) 「根本氏家系」(根本東之介徳壽が孫の忍を激励するために記したもの)

その先祖は正一位太政大臣藤原房前(北家)の五男魚名=川邊氏の末孫である。
その数代後に、藤原通基 — 通徳 — 通直 — 徳家 — 徳義

通与 — 徳栄 — 徳明 — 徳廣 — 徳孝

- ① 通与=通基6代孫分家、惣左衛門。実は東茨城郡中丸村本多氏生まれ。
(1)にある通興と同一人物。「與」と「興」の混同が見られる。
- ② 徳栄=佐七郎、後に惣左衛門。実は那珂郡佐和村鈴木氏生まれ。
(1)にある通興と徳栄の二人について出自が異なる。
- ③ 徳明=伊三郎、後に与惣衛門。
- ④ 徳廣=吉之平、後半次衛門、庄屋(里正)として水戸藩の天保検地を担当する。妻是那珂郡鴻巣村大内氏女
- ⑤ 徳孝=「実は久慈郡西宮村鈴木右馬之允の3男、文武相嗜み、志宜しき者として軍馬係、兵員御組入になり、苗字帯刀御免^{ごま}、行年82歳。」
徳孝の妻早子は「徳廣の長女。家政を昌^{ちやう}んにし子弟を教育し、内外相^{ひとし}齊く親和す。行年80歳。」

と記してある。正の母も偉大な方であった。

さらに、

徳孝 — 徳壽(東之介) — 徳直(壽一郎) — 勉 — 喜代寿(現当主)

○ 正(次男)	○ 丑蔵(次男・渡米)	○ 忍(次男)
○ ちよ子(長女)	○ 可茂(3男)	○ 耐(3男)
○ かね子(次女)	○ 女(4人有り)	○ 辰(4男)
○ はな子(3女)		○ 女(4人有り)

- ① 東之介徳壽= 天保8年(1837)4月生まれ。水戸藩組長、福田村戸長兼務、居村村長、村会議員。初め増一郎、壮年に東之介。家督を相続す。
 - ② 正 = 次男、分家ス。初メ十三才ニテ豊田天功先生ノ門ニ入り、十七才ニテ水戸御金方勤、二十才郡務方、二十二才廃藩、江戸へ出づ。
 - ③ ちよ子=長女
水戸藩士西野正幹に嫁し、二女かね子は東茨城郡渡村根本政信に嫁し、三女はな子は那珂郡鴻巣村秋葉氏養女となるも不幸にして早世。
 - ④ 寿一郎徳直= 文久2年(1862)4月10日生まれ。
 - ⑤ 勉 = 明治19年(1886)8月15日生まれ。
- と続く(「系図」については一部省略してある)。

(3) 根本正翁の実兄東之介徳壽

— 孫忍への期待、根本禁酒煙農場の設立 —

根本正翁の実兄東之介は筆記をよくしたと云われる。長子の寿一郎が家督を相続し、その子で長孫となる勉は順当に家督を相続した。勉の弟で東之介には次孫に当たる忍に対しては家を離れて活躍することを期待した。そのために、大正5年(1916)8月9日既に刊行されていた維新前史『桜田義挙録』(雪の部)を写して「国ノ為ニ身ヲ捐ルハ是ヲ仁ニ本ヅク」と義挙を称え、

右、維新前史櫻田義挙録三巻の内、雪の部水戸烈公齊昭の君の北海道開拓の請願、及び蝦夷地経営に関する件を抜写す。

月も心も労して筆を留る 時年八十歳 根本東之介

大正五年一〇月 天保八年四月生 徳壽

と記して、その著の中に流れる水戸藩主従の精神を体得させようとしたのである。

それと同時に、根本家の「家系」を明らかにして根本家の家訓、家風を強く認識させようとした。それが、この写本の途中に記された「根本氏家系」である。

根本忍は明治22年(1889)2月20日の生まれ。根本正には甥に当たる。身体壮健にして農を好み忍耐に富んでいた。後に北海道に渡って農場経営に従事することになる。

これについて根本正は、兄の東之介が『櫻田義挙録』を写した中に記した「常陸国那珂郡東木倉村根本氏家系」の後に、大正6年(1917)1月10日付けの記録として

かつて先君烈公(徳川齊昭)が早くから蝦夷地拝領、開拓に意欲的であった先見の明を記載し、よくその意を継承し、以て帝国発展の基礎を堅固ならしめんとするにあり、余、深く水戸侯が北海道開拓の事業に熱心至誠を尽くされたるを賛成し、全力を投じ、大正3年(1914)3月に北海道北見国網走郡籾木禽村において、500町歩の土地の払い下げを受け、(内100町歩を他へ譲る。残り375町歩余り)この土地の管理者として根本忍(甥)を選抜し、那珂郡玉川村(別本に若林村とある)篠田簡の下に労働せしめ置いた。しかし、3カ年を経過しても未だ収支がかなわず、毎月数十円を送金して開拓の事業を奨励する所以のものは、先君烈公の遺志を貫徹し、また祖先根本家の恩に酬いしめんが為なり。幸いに篠田簡は誠実勤勉尋常ならず、雪中山野を跋涉して開墾事業を成功するの期に至らしめたり(要約)。

と述べている。

なお、明治2年(1869)8月、水戸藩は北海道天塩国内の苫前・天塩、上川、中川、鱒島の5郡を下付され、その内の鱒島郡は北見国利尻郡と改称された。しかし、明治4年の廃藩置県もあって翌5年に開拓使に返還されている。

明治期から大正期にかけての北海道開拓事業の意義、および甥根本忍に対して大きな期待を懸けていたことをうかがうことが出来る。

さらに続けて根本正は、

この土地をして**根本禁酒煙農場**と命名し、一切使用人をして飲酒喫煙の害を受けしめず、専ら貯金自労・自活・独立移民たらしめんことを奨励し、忍の如きも毎月給料を貯金し、数年を出でずして一家を成立せしむべき土地を所有するに至るべし。本年の如きは、篠田夫婦、忍及び他の労働者の努力により、相当の収入を見るに到れり。かくの如き事実なるを以て、数年の後には収支相償うのみならず、**根本禁酒煙農場**の盛大なるべきことを実顕するは、何人も確乎保証するに足る。

と記している。

藩主に就任してからの徳川齊昭は、財政難解決の一助および海防対策として蝦夷地開拓に意欲を示し、「北方未来考」まで著して開拓に対してその具体策を練っていた。根本正は、その齊昭の遺志にも酬うことが出来ようと北海道開拓にも臨んだのである。さらには、その開拓村を「根本禁酒煙農場」と命名しようとしたことにも驚く。根本正が未成年者の禁酒禁煙を実現させたことは周知のことであるが、この精神を新天地の村名にも取り入れようとしていたことは、根本正の生涯の信念が奈辺にあったかを実感するとともに、その徹底ぶりに学ぶところ実に大きいものがある。(了)

「東木倉村図」に見る村の景観（別添絵図参照）

この絵図は、「天保改正」・「東木倉村図」と赤筆で記され、軸装されたものである。水戸藩では天保11年（1840）から税の公平化を目指して検地が開始された。この検地事業にさいしては、根本半次衛門徳廣が庄屋役として参画している。藩では、この検地に伴い、村ごとの「検地帳」と共に「村絵図」の作成を命じたのである。この「東木倉村絵図」はその一つであり、検地事業が終了した後の天保14年（1843）から嘉永3年（1849）頃にかけて作成されたものと思える。画人は照沼貞斎であるが、この人物については未詳である。しかしながら、東木倉村全体が具体的に色彩豊かに明瞭に描かれており、当時の様子を知る上で大変貴重なものである。これを、今日まで保存されてこられた根本家に感謝いたすところである。

以下、この絵図に描かれた東木倉村を鳥瞰してみる。

- ① 当時、西方台地上の袴塚村から那珂台地方面へ向かうには、万葉集にも詠われた「曝井」のある「滝坂」を下り、那珂川の「中河内の渡し」を渡り、中河内村の鹿島神社を過ぎ、田圃の中道を那珂台地へと向かう。また、台渡村からは現茨城大学裏手通りの小岩井坂を下り「中河内」あるいは「国田の渡し」（当時は田谷村であったことから「田谷の渡し」であったか）を渡って東へ向かったものと思われる。なお、水戸街道（現 118 号）は、西木倉旧街道から田圃の中を上河内村へ向かい、一本松附近へ出た。
東木倉村下の小場江用水路を渡ると道路は左右に分かれる。右方へ行くと左手に上溜池・下溜池が見える。下溜池の南端と二つの溜池の境界、さらに上溜池の上方にと3箇所以上に水車が回っていたという。この溜池の西側台地には、現在円墳が1つあり、墳丘の裾地に文化3年（1806）の如意輪観音石像や古人の墓碑が見られる。廃寺（那珂西村真言宗勝幢院末寺の常福院か）の跡といわれている。
- ② 一方、左方へ上ると、途中の右手に元の細い道がかすかに見える。今では使用されていない。ここの坂は庚申塚と呼ばれているという。たしかに、明和元年甲申（1764）の庚申石仏（上半身欠損）と文政10年（1827）の二十三夜供養石塔が残っている。さらに上がると後藤家の墓所があり、徳川斉昭時代に郷士として追鳥狩などの軍事訓練に参加した後藤信之允や、昭和初期に農村改革を目指して奔走した後藤國彦・信彦兄弟らも眠っている。坂を上りきると宿へ出る。宿通りの直線の道路は福田村へ通じる主要街道、太田方面を目指す人々の往来も多かったと思われる。
- ③ 宿並の右側（東方）には郷士で庄屋役を務めた後藤家がある。後藤家の「屋敷図」によると、通りに沿って南からは土塁が築かれ、その内側には庭木が並木植えされていた。北からは板塀が張られ、その内側にも同じく並木植えがなされ両方の中には扉をつけた四脚門らしき大きな門も建てられていた。
- ④ その後（北方）には鎮守吉田神社がある。境内には老木「つばき」があり、現在は市指定天然記念物となっている。明治期の初期、廃仏毀釈政策により清水寺が清水神社に、境内の弁財天が巖島神社と改められことがあり、清水寺再興のあとはこの神社境内に寄宮された。神社前の道を東へ下りると宮前溜池がある。湧水池のため常に一定温度であり、村人はよく「種粃」を浸して芽出しをしていたという。
- ⑤ 神社の西方、街道の西側に見える大きな「曲がり屋」が庄屋を務めた根本正の生家で

ある。幼少時の根本正が、様々な体験を通して、逞しい身体と豊かな精神力を育んでいった様子を想像させる。

⑥ 街道が下り始める左手の台地上に根本家の墓所がある。ここに、根本正の祖先・祖父母や両親が眠る。根本正の最愛の長男美倫も眠り、正自身もここに埋葬され眠っている。正・美倫父子を顕彰する立派な碑が今日のふるさとの繁栄を見つめている。

⑦ 街道に沿って一旦下ってまた上がる左手に、松林に囲まれた清水寺（本尊白衣観音）があり、「清水の観音様」として多くの参拝者で賑わったと云われる。境内下段には湧水豊かな清水池に弁財天が祀られ、その脇に大きな山門があり、手前にもお堂が見える。池から流れ出る水量はかなりのものと見える。この水は、周辺の田圃を潤すと共に下方の溜池に溜められ、さらに溜池の下を流れている小場江用水路に入り、用水路の水と相まって下方の田圃に流れ出て豊かな稔りをもたらす。溜池下へくねっていた小場江用水路は、現在は直線路に据え変えられている。

鎮守吉田神社の秋の祭礼には、収穫を終えた下方の村人がお礼の奉納米をもって陸続と集ってきたそうである。

⑧ 清水池前の石段を登ると、正面に2層建ての本堂；観音堂が眼前に迫る。廻りには庫裏その他の堂宇も3棟見える。流石に水戸光圀の肝いりで建立されただけに、華麗な伽藍であったことが分かる。深淵幽玄な境内・伽藍と滾々と湧き出る清水の流れに接した参詣者には、まさに「京都の清水」の思いとしてこの観音堂が迫ったことであろう。

この清水寺も、大正7年（1918）、大正12年（1923）の2度の火災により一変してしまったようである。

⑨ この寺の先は福田村へ向かうが、その辺りは「清水原」と呼ばれた平地林で、水戸藩の軍事訓練場でもあった。

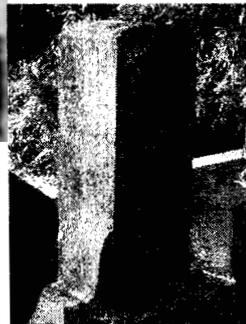
【根本家墓所内】



▲ 根本正翁之碑



← 根本美倫之碑



▲ 根本徳孝・波屋子の墓碑



▲ 根本半次衛門の墓

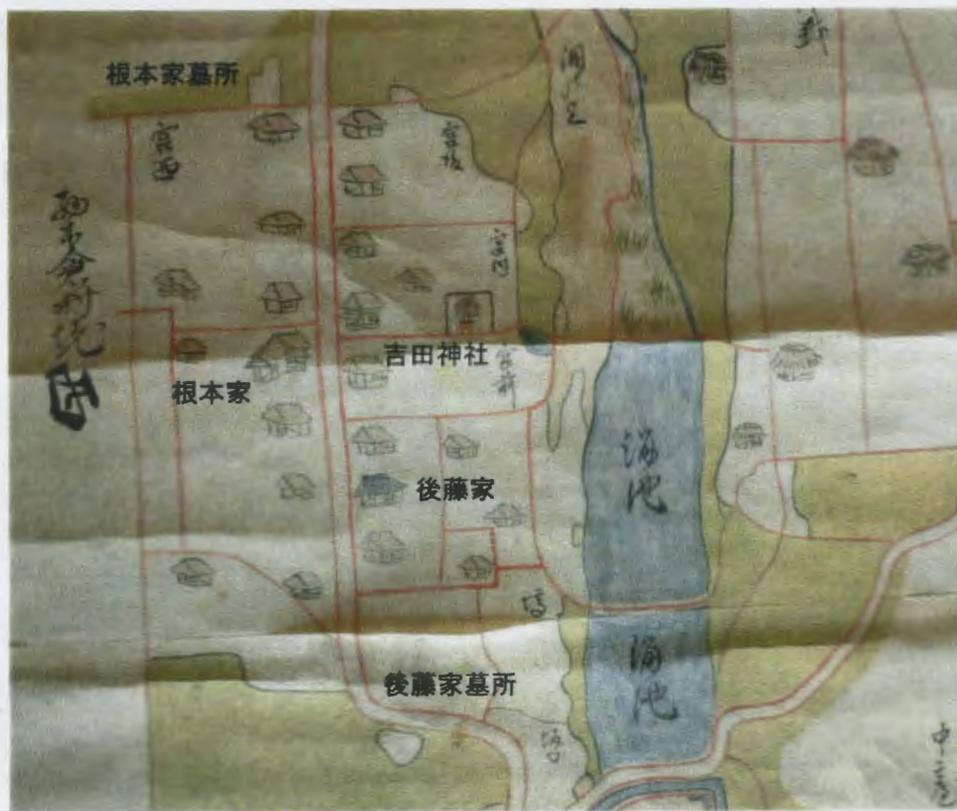
清水原・福田村へ

← 東木倉村絵図 (根本喜代壽氏所蔵)

天保検地絵図、照沼貞斎筆



▲ 清水寺境内



東木倉村
街道宿

笑い与健康

理事 小林 茂雄

「笑う門には福来る」「笑いは健康の素」といわれるように、笑いは心身の健康には欠かせない効力を持っています。笑いは人間だけが持つ能力であり、笑うという発散機能によりストレスを解消し、毎日元気や潤いを与えます。

今は亡き精神科医で医学博士の斎藤茂太先生は次のように言っています。

「私は1回笑えば、寿命が1日延びると信じている。根拠は何かと問はれても困る。ただ、快活な日常、笑いのある日々がストレスを霧散させ、食欲を増進し、皮膚の色艶をよくし、人間関係を楽しくすることは間違いない。」

笑いの生理的効果として、次のようなことがあげられています。①免疫力が上がる、②血糖値が下がる、③血液がサラサラになる、④筋肉がゆるむ(リラックス)、⑤呼吸が深まる、⑥脳波がアルファ波になる、⑦エネルギーが高まる、⑧気分が愉快になる、⑨チャレンジ精神が旺盛になる等、良くなることが沢山あります。したがって、医療の現場でも笑いの効果を活用しています。(裏面参照)

テレビ番組を見てみると、漫才、落語、タレントによるお笑い番組などが沢山あります。私はNHK、日曜日の「笑いがいちばん」4チャンネルの「笑点」をよく観ています。都合悪く観られない時は、予約録画して、後で観ます。笑ってストレスを発散しています。

笑いは長生き健康法5則の一つです。5則とは、一考(1日1回考える)、十笑(1日10回笑う、出来れば声を出して笑う。感動することでもよい)、百気(1日100回深呼吸する)千字(1日千字を書く)、万歩(1日一万歩、歩く)、毎日実行することは、なかなか大変なことですが、出来るかぎり心掛け、続けてみたいものです。

人生は一度だけです、二度はないです。カーネギーの言葉に、「他人と過去は変えられないけれど、自分と未来はかえられる。」とあります。これからの人生を、いろいろな友達とサロンの場をつくり、趣味を楽しみ、感動体験を重ね、大いに笑って楽しく、健康で過ごしましょう。

(参考) 平成23年2月18日 県総合福祉会館における記念講演「笑い与健康」

(講師 日本笑い学会 石井 志津夫 氏) より

笑いを取り入れた医療

がん 心臓病 脳卒中 糖尿病 うつ・痴呆症 リュウマチ
アトピー

*****笑いの効果を医療に活用している例(主なもの)*****

- 1 ノーマン・カズンズ(カルフォルニア大医学部脳研究所教授)
著書「笑いと治癒力」(岩波現代文庫) 自分の膠原病、心筋梗塞治療に笑いを取り入れた
- 2 シュバイツァー博士(アフリカ・シュバイツァー病院)
医師と看護婦のディナーに毎日ユーモアのあるスピーチ
- 3 伊丹仁朗(新倉敷・心療内科すばるクリニック院長) 「笑いの健康学」(三省堂)
がん治療、生きがい療法 病院内で落語会を開催、患者にユーモアスピーチの会を
開催 98年モンブラン登山。 2000年 日米合同がん克服富士登山200人
- 4 吉野慎一(日本医科大教授) 著書「脳内リセットー笑いと涙が人生を変える」(主婦の友社)
慢性関節リュウマチ治療に応用 林家木久蔵の落語会を病院内で開催
- 5 昇 幹夫(産婦人科医、日本笑い学会副会長) 著書「笑顔がクスリ」保健同人社
「笑いは心と脳の処方箋」(リヨン社) 「笑って長生き」(大月書店)
92年がん患者とともに、モンブラン登山。 00年日米合同がん克服富士登山
- 6 中島英雄(群馬・脳神経外科病院医師理事長・落語家「桂前治」)
人間は前頭葉が正常に働かないと笑えない。落語で笑えるようになれば退院
- 7 高橋和江(医学博士・癒しの環境研究会代表世話人) 著書「笑いの医力」
患者力をアップさせるため、医療現場に笑いを広めるべく精力的に活動中
- 8 帯津良一(川越・帯津三敬病院院長) 著書「養生は爆発だ！」 ビジネス社
病院内の体育館でがん患者に丹田呼吸法やヨガ・氣功を医療に応用
- 9 村上和雄(筑波大名誉教授) 著書『笑う! 遺伝子』 一二三書房
吉本興業と笑いの共同研究。 糖尿病患者が漫才を聞くと血糖値が押えられる
- 10 志水 彰(臨床神経科医、 関西福祉科学大学教授)
著書『笑いの治癒力』PHP うつ病患者が笑うようになると精神が安定し治る
- 11 木俣 肇(小児科医 日本笑い学会会員)
アトピー性皮膚疾患の治療に笑い療法。 「かゆいときには笑いましょう」
- 12 福澤恒利(医学博士・表参道福澤クリニック院長・落語家「立川らく朝」)
著書立川らく朝の「一笑健康」(春陽堂) 生活習慣病予備軍のために、なんとか
したい。そんな決意でクリニックを開く。 健康落語でも有名。

根本正顕彰会会報文献目録について（その3）

—49号～65号—

會澤義雄

第49号

第18回全国生涯学習フェスティバル—まなびピアいばらき2006参加事業

「青少年の健全育成を目指した根本正」シンポジウム

1 根本正の概要

會澤義雄

2 根本正の思想

柏村一郎

3 根本正の地域への貢献

仲田義一

4 「青少年の健全育成を目指した根本正」、「根本正の精神を今日生

かすために」茨城県立中央病院内科医長 天貝賢二

公民館まつり2006参加「根本正展」—水郡線全通まで 根本正顕彰会

ゆかりの地を訪ねる旅の報告（横利根閘門・伊能忠敬生家と記念館・古い街並み・

東薫酒造など）

茨城・千葉県境変更問題の経過

會澤義雄

伊能忠敬生家と記念館訪問

川上 清

第49号別冊

第10回根本正顕彰会定期総会講演要旨「根本正を高校の授業で取り上げて—水戸

二高での教育実践を中心に—

日立北高校教諭 澤田浩一

第50号

第49回研究例会報告（根本正の地域への貢献・概要・思想）仲田義・會澤・柏村

まなびピアいばらき2006（概要・報告・感想など）

第51号

第50回研究例会報告「根本正と大日本平和協会」について

柏村一郎

米欧貧児出世美談、武石浩玻、式守伊之助など（資料のみ）

調査研究委員会

仲田昭一理事の講演を聴講して（小宮山楓軒）

遠藤和男

第51号別冊

根本正と「大日本平和協会」について

柏村一郎

第52号

第51回研究例会報告「根本正・武石浩玻・19代式守伊之助に学ぶ」 遠藤和男

世界禁煙デー茨城フォーラム

會澤義雄

「本県の禁煙運動が地に着いてきた」

川上 清

第52号別冊

第51回研究例会資料（武石浩玻の生涯・飛行機国防論）

遠藤和男

第53号

第52回研究例会報告「水戸義公と壁書」（家康公の遺訓と遺言碑、上杉鷹山含）

仲田昭一

第54号

第53回研究例会報告「日本に於けるウエスト嬢について」

會澤義雄

根本正顕彰会DB（データベース）の構築状況

鈴木正矩

道德教育に高き理想を

仲田昭一

第55号

報告 第8回根本正ゆかりの地を訪ねる旅—横浜市

(横浜開港の歴史、ヘボンとヘボン塾、横浜での根本正、横浜あれこれ、三溪園と原三溪)

那珂市「公民館まつり」根本正展示会報告 仲田昭一
トピックス (根本正自筆の書「世界の最大物」・貴重な資料の入手など) 広報・IT委員会

第56号

茨城・ブラジルリーダー研修会に参加して 仲田義一
平成19年度禁煙啓発研修会開かれる 川上 清
総会講演要旨「根本正と水戸教学」一弘道館記一 水戸史学会副会長 久野勝弥
ウエスト嬢小伝及禁酒演説集について 會澤義雄

第57号

平成20年度世界禁煙デーに関わる公開学習に参加して 川上 清
総会講演要旨「根本正と植民地探検」 會澤義雄
『不屈の政治家根本正伝』の発刊を終えて 編集委員会

第58号

研究例会報告 根本正と日々の力 (附講演資料) 仲田昭一
根本正ゆかりの地を訪ねる旅「少年期の師佐川伊豫之介を訪ねて」 根本正顕彰会
「不屈の政治家根本正伝—今こそ生きる人間を大切に作る心」 元瓜連町長先崎千尋
テーマ「少年期の師佐川伊豫之介を訪ねて」 益子輝雄
ブラジル移民100年を記念して 柏村一郎

第59号

平成20年度「公民館まつり」報告「根本正とブラジル移民100周年」 小林・山田
仲田昭・仲田義・鈴木・増子・横地・會澤

<内容>会活動及ゆかりの地を訪ねる旅、根本正とメキシコ・ブラジル移民、明治政府と移民政策、根本正のメキシコ移民地探検、吹きすさぶ排日の嵐アメリカ、根本正のブラジル移民地探検と移民、今の日本とブラジル(伯)の人的・経済的交流

第53回研究例会報告「江原素六と根本正」 柏村一郎
水戸黄門ウオークに参加して—根本正家と清水寺を巡る 小林茂雄
読者の声「不屈の政治家根本正伝」を読んで 33名
学校教育とたばこ議論 無煙世代を育てる代表・全国禁煙推進協議会長・
光潤会平間病院長 平間敬文

第59号別冊

『江原素六と根本正』(資料I・資料II附) 柏村一郎

第60号

第54回研究例会報告「水郡鉄道発案者白石禎美と根本正」(資料附) 仲田義一
茨城県北部肺がん市民公開セミナー報告 會澤義雄
禁煙指導者フォローアップ研修会報告 川上 清
茨城・ブラジルふるさとリーダー交流事業報告 増子輝雄
「日本基督教団銀座支部提供写真」(明治16年・全国基督教徒大親睦会幹部)

第61号

総会講演要旨「禁煙活動の今日的課題」—ニコチン依存を考える— 平間敬文
第1回公開講座講演要旨「蘭学者豊田小太郎と根本正」 仲田昭一
今年の世界禁煙デーの記念講演を聞いて 川上 清

日本基督教団銀座教会からの貴重な写真（その2）銀座教会2次会堂定礎式、特別伝道記念〈何れも根本正参加〉 會澤義雄

トピックス 若者と薬物について

柏村一郎

根本正と国民教育『日本の教育から』

仲田昭一

第62号

21年度根本正顕彰フェスティバル開催報告

（内容）映像で見る「根本正の生涯」、青少年の健全育成の精神と業績（會澤義雄）、水郡線敷設事業の業績（仲田義一）

21年度「公民館まつり」（「根本正と高層気象観測所」）〈報告〉

高層気象観測所があったなら：附遭難漁民追薦の碑文（仲田昭一）、山階宮菊麿殿下と筑波山観測所（仲田義一）、当時の世界の高層気象観測所の状況（會澤義雄）、高層気象観測所設置の提言（横地富子）、長峰原に高層気象観測所完成（山田正巳）、顕彰会の歩み・ゆかりの地を訪ねる旅紹介（小林茂雄）、DVD「根本正の生涯」（鈴木正矩）

訪ねる旅報告

ブラジル開拓移民の苦難の克服と発展への軌跡〈1〉

會澤義雄

茨城県立健康プラザ「禁煙指導者研修会」参加報告

川上清

私のシベリア抑留記「見返り橋」

会員 吉澤金次郎

トピックス 「根本正の業績を後世に伝えたい」秋山道子 『茨城新聞』など

第63号

21年度「第3回公開講座」開催されるー『世界の禁煙運動と日本の現状』と題して発表（附：別添資料）

川上清

ブラジル開拓移民の苦難の克服と発展への軌跡（2）

會澤義雄

近年の世界と日本の激動を根本正の思想の視点から見る

柏村一郎

根本正の生誕地「東木の倉・清水が原」ーその精神が伝わるような文教地帯一

増子輝雄

根本正翁所蔵の「桜田門外の変：戦闘図」から考える

仲田昭一

第64号

祖父白石禎美と代議士根本正先生（平成22年度総会・講演要旨）

白石禎彦

ブラジル開拓移民の苦難の克服と発展への軌跡（3）

會澤義雄

不屈の心でひたすらに生く：日本の保母第1号 豊田英雄子

仲田昭一

（『文部時報』平成2年5月号より転載）

第65号

根本正顕彰フェスティバル報告

事務局

「根本正ゆかりの地を訪ねる旅」（根本正と田中正造・附資料）報告

事務局

平成22年度那珂市中央公民館まつり報告

根本正顕彰会13年の歩み、根本正ゆかりの地を訪ねる旅

小林茂雄

根本正の家庭教育環境

増子輝雄

根本正のアメリカ留学生活（小学校入学～大学卒業）

會澤義雄・仲田義一

根本正と豊田天功、小太郎、英雄

仲田昭一

根本正が学んだ塾・学舎出身の偉大な人物

横地富子

ブラジル開拓移民の苦難の克服と発展への軌跡（4）

會澤義雄

工業製品も食料品も日本製が一番安心でとても美味しいよ

鈴木正矩

【トピックス】

(1) 雛人形展の記念講演会

「青い目の人形」と答礼人形「筑波かすみ」が開催されました。

茨城県那珂市歴史民俗資料館の「雛人形展」は今年で10年目を迎えました。その展示に合わせて展示講演会は開催されてきましたが、今年も平成23年2月20日（日）にかつて「筑波かすみ」里帰り実行委員会事務局長を務められた北村栄子さんが「青い目の人形」と答礼人形「筑波かすみ」と題して講演されました。

「青い目の人形」が贈られてきた背景は、大正2年（1913）にカリフォルニア州で排日法が成立するなどアメリカに於ての排日運動が高まり、それが年々激しくなっていました。そのような中での昭和2年（1927）、日本で教鞭を執ったことのある米国宣教師グーリック博士が、「世界の平和は子供から」との思いから、「青い目の人形」をいわば日米の親善大使として日本の「ひな祭り」に間に合うようにと贈られたのでした。この受け入れの中心になったのが、当時の実業界の第一人者であった洪沢栄一翁でした。人形は日本各地の小学校に贈られ、盛大な歓迎会も行われました。

これに対して日本では、その答礼として市松人形を各県一体ずつ贈ろうとの運動が広がり、小学生はじめ多くの人々から寄付を募り実現させました。県を代表する名前がつけられ（茨城県の市松人形には「筑波かすみ」、小学生代表者の「贈ることば」も添えられてこれまた盛大な送別会が開かれました。

この「筑波かすみ」の里帰り事業は、北村さんの献身的なご尽力により平成18年（2006）10月に実現し、県内の当時の関係者をはじめ県民全体に大きな感動をもたらしました。

それは、平成16年4月、北村さんが地元の小学校の校長室を訪ねた折、古い人形に出会い「このお人形は大分古そうなお人形ですが、どんなお人形ですか」、「青い目の人形；メロディーだよ」のやりとりから始まりました。実現までの過程は想像も付かないほどの艱難辛苦であったことでしょうか、「その時々に出会った多くの方々の温かい支援があったことからできたことでした」と謙虚にお話しされました。

この里帰り事業は根本正との関連を思い起こさせてくれました。

① 出合いでの新鮮な感動と実現への邁進力

「マッチと時計」との出合い、感動が米国留学への意欲を燃やさせ、実現へ努力していった。（多くの人々が見たであろうに他の人は考えが広がらなかった）

② 宣教師たちの慈善運動

キリスト教の平等の精神に魅せられて入信し、その精神を生涯のものとした。

人々の平等を強く意識しての政治活動であり、慈善的活動もおこなった。

③ 周囲の人々の支援

中村正直はじめ多くの日本人、横浜郵便局員ファー、弁護士バラストー、大事業者ピリングスなど米国人の支援を受けてた。人々への感謝の念を忘れなかった。

④ 移民と排日

自由移民策を主張した根本正、思いがけない米国の排日運動が移民先として中南米視察へと向かわせた。

⑤ 世界の平和を希求

日露戦争後の日本人の在り方、戦後の強硬外交方針に警鐘を鳴らしていた。

グーリックの「国際児童親善会」と根本正らの「大日本平和協会」結成

等々です。

「答礼人形」

日本国際児童親善会と文部省は、「青い目の人形」のお返しに答礼人形をアメリカの子どもたちに贈ることとし、「青い目の人形」を贈られた全国の小学校などの児童から一人一銭の献金をもとめて五十八体の答礼人形(市松人形)が作られました。

この市松人形は、本体と衣装、付属品(箆筒、鏡台などの小道具類)を合わせて一体三百五十円もする豪華なもので(当時の小学校の先生の月給が四十〜五十円)、東京や京都の一流人形生地師が制作し、衣装などは高島屋や三越などの一流百貨店で調製されました。

答礼人形は、日本を代表する一体(「倭日出子」)のほか、各都道府県や六大都市及び朝鮮・満州・台湾・樺太など当時日本の統治下にあった植民地などを代表するように割り当てられ、「筑波かすみ」(茨城県代表)、「東京子」(東京)、「山梨富士子」(山梨)、「長野絹子」(長野)などと郷土にちなんだ名前が付けられました。

答礼人形は、「出身」各地の送別会を経て東京に集められ、日本青年館で行われた盛大な送別会の後、

一九二七年(昭和二)十一月、「友情の人形」にならったバスポートや日本の子どもたちからアメリカの子どもたちへの「友情の手紙」を携えてアメリカに渡りました。

水戸市の下市小学校の昭和二年当時の「学校日誌」によれば、「筑波かすみ」の送別会は、同年十月十五日午後一時から茨城女子師範学校の講堂で行われました。下市小学校だけでも六年女子の代表六十名と職員が参加したとありますから、「青い目の人形」を贈られた多数の学校から代表が参加して盛大な送別会が行われたと思われれます。

また、「筑波かすみ」に託された県内児童の「友情の手紙」十七通が、ネブラスカ州リンカーン市の州立大博物館に三重県の答礼人形と共に保存されていることが、答礼人形研究家の高岡美知子氏の調査で分かりました。

アメリカに着いた人形たちは盛大な歓迎を受け、全米各地を巡回した後、各州の公立博物館や美術館に一体ずつ配分されて展示されました。

「筑波かすみ」はウイスクンシン

州ミルウォォーキー市の公立博物館に展示・保管されましたが、「筑波かすみ」里帰り実行委員会の依頼により、キッコーマン米国人キッコーマン・フーズ・インク社長・島山邦紀氏(アメリカ在住・水戸市出身)が博物館当局と折衝を重ねてこの度の里帰りが実現しました。

同博物館には、「筑波かすみ」が携えて行ったと思われる箆筒、鏡台などのミニチュアの小道具も多数保管されているほか、「桜の国の国民」から「台衆国の小さな友人」にあてた英文の手紙、「大日本帝国人形旅券」や「旅券査証」(ビザ)、日本郵船の一等切符も残っており、その一部も里帰りしました。

現在所在がわかっていない米国に渡った答礼人形は四十四体ですが、そのうち「筑波かすみ」を含めてすでに三十三体が、里帰りを果たしています。



「青い目の人形」

一九二七年（昭和二）、アメリカの子どもたちから日本の子どもたちに一二、七三九体もの「友情の人形」が贈られました。これらの人形は、日本の子どもたちに宛てた「友情の手紙」や特別のパスポートと日本の現地領事館発行の査証（ビザ）などを携え横浜や神戸の港に船に乗ってやってきました。

この人形は、一九二一年（大正十）に発表されて広く歌われていた「青い目の人形」（野口雨情作詞・本居長世作曲）の歌のイメージにぴったりだったことから、いつしか「青い目の人形」と呼ばれるようになりました。

一二、〇〇〇体余りの人形のうち一一、二四六体が、文部省（当時）を通して全国の小学校や幼稚園に配布されました。茨城県には二四六体が配布されましたが、日米が戦った太平洋戦争を生き延びて、今なお九体の人形（全国では三二二体）がほぼ当時のままの状態で見守られています。

●ギューリック博士と渋沢栄一
この人形を日本の子どもたちに贈

ることを思い立ったのは、二十年も前の長い年月日本で伝道生活を送り、知日家で親日家であったシドニー・ギューリック博士でした。当時のアメリカでは、勤勉で低賃金で働く日本人移民に働く場所を奪われることを懸念して、日本人移民を排斥する機運が急速に高まり、対日感情が悪化していました。

このことに心を痛めた親日家の博士は、アメリカの子どもたちから日本の子どもたちに親愛を込めて人形を贈ることによって、次代を担う子どもたちの心に相互の理解と友情を育み、両国の関係がいつまでも平和であることを願ったのです。

当時博士は、「世界の平和は子どもから」をスローガンに各国の子どもたちに友情のプレゼントを贈る活動をしていた「国際児童親善会」の首脳の一人でした。博士の呼びかけに応じて、全米各地の学校やYWCAなどの団体がお金を出し合い、親善会が調達したアメリカやドイツ製の裸の人形に手製の洋服や帽子を着させて一二、〇〇〇体あまりの人形が用意されました。

この人形の受け入れの中心になったのは、博士と親交のあった当時の実業界の大立者、渋沢栄一でした。

渋沢は文部省や外務省にも協力を求め、「日本国際児童親善会」を組織して受け入れ態勢を整えました。

●歓迎会

これらの人形は、日本の「ひな祭り」に間に合うよう一九二七年（昭和二）一月から三月にかけて横浜港や神戸港に着きました。

三月三日のひな祭りの日、東京青山の日本青年館で二、〇〇〇人もの子供たちや関係者が参加して盛大な歓迎会が行われ、その後文部省によって全国各地の小学校や幼稚園に配られました。

着物しか見たことがなく、外国のものを目にした子どもたちには、「洋服」を着て体を曲げると「ママー」と声を出す金髪の「青い目の人形」は新鮮な驚きをもって迎えられました。

贈られたそれぞれの学校などでも、持ち寄った日本人形も飾って盛大な歓迎会が行われました。その後人形は校長室などに飾られ、アメリカの子どもたちの平和と友情の心を日本の子どもたちに伝えてきました。

●受難

ところが一九四一年（昭和十六）、ギューリック博士らの願ってもなく、不幸にして日本とアメリカは戦火を交えることになりました（太平洋戦争）。戦争の激化とともに「青い目の人形」は受難の道をたどりましました。人形は「鬼畜米英」の象徴とみなされ、憎いアメリカの「仮面の大使」などと呼ばれたりして、その多くは破壊されたり焼却されたりしました。まさに「狂気の時代」でした。

●良心

米英憎しの風潮が国の隅々まではびこった狂気の時代でしたが、可愛い人形に何の罪もないのに、と考えた心ある人々もいました。

戦争末期に黒沢小学校に勤務していた菊池博士先生（大子町在住）は、焼き捨てるように言われた時、何の罪もない可愛い人形をどうしても焼き捨てることができず、誰にも内緒で図書室の本棚の裏側に隠しました。今「生存」している人形はこんな人々の手によって密かに処分を免れ生き延びて、今私たちの眼前にあります。

茨城に今も「健在」の「青い目の人形」



大子町 黒沢小学校「メリー」

所有者 大子町立黒沢小学校
木製のケースと当時の写真も保存されている。服や下着、靴下は1973年に新調されたが、本体や金髪、靴などは当時のままである。
戦時中、敵の国の人形であることから迫害されることを危惧した一女性教師が、図書館の本棚の一番下の本の裏側に隠したという。



石岡市「メリー」

所有者 石岡市愛友幼稚園一個人
スペシャルパスポート(特別旅行免状)とニューヨークの日本総領事館のビザ(人形査証)の実物及び送り出した学校からの英文の手紙(手書き)とギューリック博士の署名のある日本文の手紙が保存されている。また園長保母二人及び園児たちが昭和2年5月5日に行った歓迎会の写真もある。



豊岡小学校「メロディ」

所有者 水海道市立豊岡小学校
携行していたと思われるパスポートなどが無いので本来の名前は分からない。「メロディ」は平成3年に児童の公事によって付けられた。



結城市 明照保育園「レベッカ」

所有者 結城市明照保育園
パスポートなどは残っていないが、当時の園長(園を運営していた弘経寺住職)が書いて人形に添えた人形の名前や「大切にしましょう」と園児に呼びかけた書き付けが残っている。



筑波小学校

所有者 つくば市立筑波小学校→明野町・熊倉勇子氏保 管 土浦市博物館
この人形は学校の裁縫室に飾られていたらしい。戦後、校舎建て替えの時、捨てられそうになったのを熊倉氏が譲り受けた。現在身につけている帽子や衣装は熊倉氏が着せてあげたらしい。



古河幼稚園「メリー」

所有者 古河幼稚園
この人形が携えてきたと思われるパスポートや手紙は残っていないが、添えられてきた着替え数着とバッグが当時のまま保存されている。着衣は10年ほど前に新しいものに着せ替えられた。当時の歓迎会の写真も残っている。この人形は幸せなことに20年ほど前に一度里帰りをしている。テレビ番組「徹子の部屋」にも出演している。



常陸大宮市 隆郷小学校「クリッシー」

所有者 美和村立(現常陸大宮市立)隆郷小学校
1973年(昭和48)学校の倉庫の中から児童たちによって偶然発見された。木製の正面ガラス張りのケースに入っていて、下の引き出しにはパスポートや日本の少年少女にあてた英文の手紙も入っていた。人形は1927年9月1日に隆郷小学校に到着したが、その時の歓迎式の写真も残っている。発見当時、服や帽子は傷んでいたもので作り直された。人形は「敵性人形」として処分するに忍びないと考えた当時の先生の機転によって隠されたという。



土浦幼稚園

所有者 土浦市立幼稚園 保 管 土浦市立博物館
「青い目の人形」を破壊することが子どもたちの心理に及ぼす悪い影響を恐れた先生たちによってかくまわれたという。市立幼稚園には、人形の歓迎式の模様を撮影した二葉の写真と、歓迎式に飾られた市村人形が保存されている。名前はメリーではないかと言われている。



源清田小学校「メリー」

所有者 瀧内町立源清田小学校→河内町・大野良一氏
戦時中、焼却されることになった人形を当時小学校の若い女教師福田雅子(現)さんがかわいそうに思っで密かにしまっておいたが、戦後、再び晴れて源清田小学校に戻した。その後、大野家に引き取られ、傷んでいた衣類は大野夫人が作って着せ替え大切におかれていた。

アメリカに渡った「答礼人形」



ミス伊島
(ワシントン州)



ミス福岡
(オレゴン州)



ミス台湾
(カリフォルニア州)



ミス和歌山
(ネバダ州)



ミス奈良
(アイダホ州)



ミス石川
(モンタナ州)



ミス山梨
(ワイオミング州)



ミス新潟
(コロラド州)



ミス島根
(コロラド州)



ミス鹿児島
(アリゾナ州)



ミス山口
(ニューメキシコ州)



ミス岡山
(ノースダコタ州)



ミス鳥取
(サウスダコタ州)



ミス三重
(ネブラスカ州)



ミス静岡
(ミズーリ州)



ミス北海道
(アイオワ州)



ミス兵庫
(ミズーリ州)



ミス京都市
(アーカンソー州)



ミス茨城
(ウイスコンシン州)



ミス秋田
(ミシガン州)



ミス島伊
(インディアナ州)



ミス富山
(ケンタッキー州)



ミス岐阜
(オハイオ州)



ミス沖縄
(オハイオ州)



ミス大阪府
(オハイオ州)



ミス香川
(ノースカロライナ州)



ミス埼玉
(サウスカロライナ州)



ミス名古屋
(ジョージア州)



ミス山形
(メイン州)



ミス岩手
(アラバマ州)



ミス高知
(ペンシルベニア州)



ミス長崎
(ニューヨーク州)



ミス京都府
(マサチューセッツ州)



ミス大分
(マサチューセッツ州)



ミス岐阜
(コネチカット州)



ミス大阪市
(ニュージャージー州)



ミス関東州(元)
(ニュージャージー州)



ミス樺太
(デラウェア州)



ミス広島
(メリーランド州)



ミス大日本
(ワシントンD.C.)



ミス宮城
(カンザス州)



ミス福島
(ユタ州)



ミス関東州(現)
(マサチューセッツ州)



ミス青森
(マサチューセッツ州)

(2) 『不屈の政治家根本正伝』を増刷しました

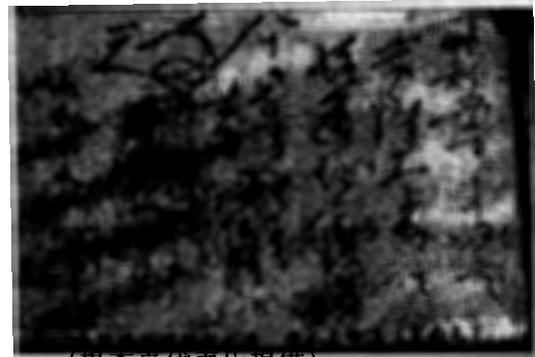
先に刊行しました『不屈の政治家根本正伝』は大変な好評をいただき、方々からの注文を受けて在庫僅少となりました。根本正翁について関心が高まりつつありますことを喜んでおります。総会で承認を得た事業として、一部修正を加えて年度末に1000部増刷しました。ご注文は、會澤義雄会長宅までご連絡下さい。1冊600円。

編集後記

- 根本正翁は、生誕地・東木倉村を早くから離れて人生の目標実現に向って修業に邁進した。しかし、常に故郷への温かなまなざし・愛情は変わらず、「禁酒村」など理想郷実現への期待を抱いていた。今回、地元の増子輝雄副会長が根本翁の生誕地を改めて解明された意義は大きい。その講座がきっかけで、翁の生家から天保期の「東木倉村図」が発見されたことは、講座開催の意義を痛感させられた。
- それに関連して、このところ「地方分権」、「地域主権」、「地方からの発信」などと「地方」・「ふるさと」がクローズアップされている。これらはかつての「幕藩体制」を想起させるが、その根底には確かなる国家観があつての「分権」でなくてはならない。また、「協働社会」の実現も叫ばれているが、いずれも根本には国家社会・統一体への視点がなければならない。中東・アフリカをはじめ各地において、その統一に向って苦悩を続ける民族の姿は他山の石でもある。
- 加藤純二顧問からは「水戸藩の書法」についての論文が寄せられた。根本正翁の筆法は独特なもので、以前から気になっていたところではあつたが、加藤顧問の論文を受けてさらに研究が進むことを期待したい。

昭和五年十二月七日
常陸太子町にて
鉄道記念除幕式
八十の年に成りても今將に
口を抱いて天を眺めむ
昭和六年 根本正

(記念撮影写真の裏面に署名されたもの)



(根本喜代寿氏提供)

- 小林理事は県内の多くの講座に参加されている。その中から、大きな感銘を受けた講演の一つとして「笑い与健康」を紹介された。混沌とした世の中、高齢化社会と否定的にとらえられがちな日常だからこそ、明るく生きる知恵を持ちたいものである。
- 根本正翁の肖像を見つめていると、偉大なる人物・政治家としてのオーラを感じる。今日活躍する政治家に、その崇高さが見られない。目先のことを十分に処理できないばかりか、高い理念も気魄も伝わってこない。志士の出現を期待したいところである。

[仲田(昭)記]